求道

第九卷

第貳號

明治四十五年三月十五日發行（第九卷第二回二日發行）

求道第九卷第貳號目次

求道

◉他力の悲願　講話　近角常觀

◉篤く三寶を敬せよ　同

◉唯佛一道　告白　川村貞治

◉諸の衆生は如來の子也

◉私の苦む有樣が可哀いとの彌陀の仰　雜錄　前本義和

◉眞僞勘決　近角常觀

講話

毎日曜午前九時　求道學舍《本郷區森川町一番地》

毎土曜午後二時　第二求道會《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午後七時　第三求道會《日本橋蠣殼町說教所》

求道　第九卷　第貳號

他力の悲願

他力の悲願の遣る瀨なき親心は、我等が罪惡深重の心を觀そなはして、益々大慈大悲の淚を注ぎたまふのである、此淚つもりて五劫思惟の本願となり、此血凝りて兆載永劫の修行となりたまひたのである、五劫思惟の本願は罪業深重の我等を飽まで救はんとの親心である、兆載永劫の修行とは、虛假不實の我等を見捨つる能はざる淸淨眞實の御念力である、嗚呼我等此親心を聞き此念力に遇ひたてまつる、如何でか信心歡喜せざるべき、如何でか慙愧懺悔せざるべき、如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲心をば成就せり、我等が苦惱を觀そなはして、悲憫したまふ大悲心、即ち是れ如來本願力の廻向である、しかも其苦惱の極を見盡して、飽まで之を滿足せしめんとて大慈大悲の成就したまひたのが如來である、我等が罪があるだけ其れだけ可愛想に思召すのである、其罪其物が如何にも憐れて仕方がないのである、しかも私の方より疑へば疑ふのが可愛想と思召すのである、私が如何程疑ふても其疑ふものを疑はず、隔てるものを隔てず、我等の罪業深重をおもしと思召さずして、願力無窮の御慈悲の塊が無限大悲の親心である。

抑々信仰に積極消極の兩面あることを忘れてはならぬ、しかも積極は消極を滿たすための積極にして、消極は之に應ずるだけの積極のあることを忘れてはならぬ、無限大悲の如來は偶然に現はれたまふたのではない、我等の罪の無邊なるを救ふがために大悲が無限である、否無限ならざるを得ぬ、彌陀五劫思惟の願を案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけりされば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、我等の罪業深重が見捨てられぬ御苦勞が五劫思惟永劫修行である、かくの如く如來超世無上の大積極の本願は、畢竟無邊極濁惡の大消極の我等があるからである、否地獄一定の我等を見るに見かねて、現はれたまひし大慈大悲の親樣である、佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなり、けりよく〳〵も此罪惡の底をも見拔きたまひて飽迄も見捨てたまはぬ御心が、か

くまでとは思はなんだ、唯不思議と信じたてまつるより外はない、是實に我等が罪業深重の大消極あるがために之を憐愍したまひて、不可稱不可說不可思議の大積極の如來が現はれて下さつたのである。

人生は無常である、世間は虛假である、人は賴みにならぬ、我身の力は役に立たぬ、罪業は如何にも深重である、此の如く一としてたよるべきものはない、佛敎の一面はたしかに消極である、しかし此大消極を救ふべき大積極の光明を頂かねばならぬ、彌陀の光明は無明の闇を照したまふのである、我等の罪惡を悲憫したまふのである、無常の人生の爲に如來常住無有變易の佛陀が現はれたまひたのである、しかも其法身の境界より光を放ち、御名を示して、我等を救ふための御身を示したまひたのである。夫故如來の御目當は罪惡の衆生である、衆生を救はずんば佛とは名のるまじといふ大誓願である、苦惱の衆生を救ふための大慈悲である、生死の海を超絕せしめて涅槃の彼岸に到らしめたまふのである、三界廿五有の苦痛を解脫せしめんがために、常樂の淨土を莊嚴したまふのである、生死煩惱の人生を救ふがために菌林遊戲の還相廻向の御力があるのである、抑々人生は苦空無常無我の大消極たるが爲に、涅槃の常樂我淨を得させんとて、如來大悲の本願を起して盡十方無碍光を成就したまひたるのである、嗚呼人間は虛假不實であり、三界は虛妄である、されば こそ悲願の一乘があらはれて下されたのである、然るに自力作善をもて進まんとするは畢竟此慈悲を空しくするのである、無駄にするのである、たとひ佛を念じ、之を賴みにするも、猶我方より佛に向ふ態度ならば自力廻向である、況んや萬行諸善は此大慈悲を蒙らずして、自己の力を賴みにする小善根小福德因緣である、念佛成佛是眞宗、萬行諸善これ假門、權實眞假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ、聖道權假の方便に、衆生ひさしく止まりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ、實に他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり、若し悲願の一乘なかりせば罪惡の我等虛妄の世界いかで心を安んずべき、如來は我等を昭ひたまはく、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の二河に墮せんことを畏れざれと、嗚呼人生此汝の御聲なかりせば天に哭し地に泣くも何の効かあらん、しかも直に來れとのたまふ何ぞ躊躇すべき、何ぞためらふべき、大悲は待ち兼ねたまふ、萬行諸善の迂廻の道を通るべきてはない、大悲を聞く一念直に仰き奉る、我等の罪業

我等の苦惱をみそなはして、能く救ひ、能く護らんとのたまふ、能の一字大悲の御力也、阿彌陀如來の仰せられけるやうは、末代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪は如何程深くともとのたまふ、此大能力、此大願力は如何なる我等の罪惡をも見捨てず、如何なる苦惱をも安樂ならしめ、如何なる障碍をも融かしたまふ大慈大悲である、本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとらしむ、嗚呼我等は逆惡の徒である、彌陀の五劫思惟の願はそくばくの罪業の私一人の爲である、思へば〳〵人生の罪惡は皆私一人に具足してある、嗚呼圓融至德の嘉號は此私一人の爲めの御廻向である。南無阿彌陀佛。

十往生經に曰く、若し衆生ありて阿彌陀佛を念じて往生を願ずれば、かの佛即ち二十五菩薩を遣かはして、行者を擁護して、若しは行、若しは坐、若しは住、若しは臥、若しは晝、若しは夜、一切の時一切の處に、惡鬼惡神をして其の便りを得せしめざる也。又觀經に云ふが如し、若し阿彌陀佛を稱禮念して、彼の國に往生せんと願へば、彼の佛即ち無數の化佛、無數の化觀音勢至菩薩を遣はして、行者を護念したまふ。復二十五菩薩等と、百重千重行者を圍繞して、行住坐臥一切時處、若しは晝若しは夜を問はず、常に行者を離れたまはず、今既に斯の勝益まします、愚も可きなり。

講話

篤く三寶を敬せよ

《求道學會日曜講話》

近角常觀

一

今日の題は『篤く三寶を敬せよ』といふのであります。之は聖德太子が『十七憲法』をお作り下されて先づ第一章に、

一に曰く、和を以て貴しと爲す、忤ふこと無きを宗と爲す。人皆黨あり亦達する者少し、是を以て或は君父に順ぜず乍ちに隣里に違ふ。然れども上和ぎ下睦く、事を論ふに諧ふときは、事理自ら通じ、何事か成らざらん。

斯く人生上凡ての事は、相和らぎ忤ふこと無く、睦しくして行かねばならぬと仰せられて、斯くして行く時は君父にも柔順に、隣國とも仲よくして行くことが出來る。其の出來るは即ち第二章の、

二に曰く、篤く三寶を敬せよ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世何れの人か是の法を貴ま非んや。人尤も惡なるは鮮し、能く敎ふれば之に從ふ。其れ三寶を歸せずんば何を以てか拄れるを直さん。

と、即ち「三寶を敬せよ」であるとお示し下されたのであります。之は昔より誰も言ふ事でありますけれども、實に此の聖

德太子が日本に於て初めて佛法をお立て下され、此の三寶歸敬をお敎へ下されたのが、實に吾が日本に於て二千年來佛法の行はれた淵源であります。猶ほ遡上れば大聖釋尊が初めて佛法をお說き下された抑々の初めよりが、佛に歸命し、法に歸命にし、比丘僧に歸命する、此の三寶歸命が佛弟子である第一の掟となつて居るので、言はゞ篤く三寶に歸敬するとせざるとが、佛法であると無いとの境目である。言を換ふれば、佛法とは篤く三寶に歸命し、お慈悲を頂きて暮す敎へが、佛法であるといふことになるのであります。處が此の聖德太子が佛法を立てられ、篤く三寶を敬せよと御敎へ下された事を今日で言へば、誰も左程著しき事と思はぬ。斯く佛法の盛んになりし今日でさへ、皆な人の佛法の根源を氣附かずに居るに、聖德太子が其の御時代に於て、斯く第一に篤く三寶を敬せよと御化導下されたは、實に我が日本に於て、長々の間國中に佛法の弘まつた大もとであると、近頃つく〳〵感じさせ貰ふ次第であります。

誠に「篤く三寶を敬せよ」とは、此の三寶を輕ろ〳〵と頂いてはならぬ、心より篤く歸敬する事が肝要であるとの御敎へであります。「三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり」――實に此の佛法僧の三寶は、四生の終歸、胎卵濕化、有りと有らゆる生物の據り所である。苟くも萬國、各自國を建て國家の存する限りは、此の佛法僧の三寶で成り建つでなければ、家國の眞精神は現はれ來らぬのである、故に此の三寶は萬國の極宗であるとの御示してあります。「何れの世何れの人が是の法を貴まざらんや」――之れが實に有難いのである。時代が變る故、時世が進む故、宗敎の上にも變化が無けねばならぬやうに言ふ人があるが、御信心の上に至りては如何なる時。如何なる世に於ても變はる可き事は無いである。又此のお慈悲頂くには、人によりて違ひがあるやうに思はれるけれども、いづく如何なる人と雖、是の法を貴まざらんやて、皆な一味平等に頂けるのである。「人尤も惡なるは鮮し、能く敎ふれば之に從ふ」――之は此世の中に、此の上もなく惡い者、此の上も無く度し難い者、夫れが此の世の中に無いとお示し下さるのでは無い、如何なる極惡の者と雖も、善くならぬといふ事は無いとお示し下されたのである。如何なる淺間しき者でも、眞實のお慈悲を敎ふれば、皆な善くなる事が出來るのであります。「其れ三寶を歸せずんば、何を以てか拄れるを直さん」。――此の佛法僧の三寶のお慈悲を頂くて無ければ、曲がれる者の眞に正しくなるといふ事は無い故、實に此の廣大な三寶の敎のみが、眞に國の眞實の敎であるとお示し下されたのであります。猶ほ又同じ憲法次の章には

三に曰く、詔を承つては必ず謹め。君は之れ天に則り、臣は之れ地に則る。天覆ひ地載す。四時順行し、萬氣通ずる事を得。地天を覆はんと欲するときは、壞れを致すのみ。是を以て君言はゞ臣承はり、上行へば下效ふ。故に詔を承はつては必ず愼め、謹まずんば自から敗る。

と、君臣の關係は天地の關係であつて、君は永へに天の如く、臣は永へに地の如くともお敎へ下されてあるのである。實に此の聖德太子の三寶歸敬の御敎へは、佛敎としてごく肝腎の

處であつて、佛敎であるか否かの右と左の割れ目の點は茲にある。茲の處を能く頂かねばならぬと思ひ、此の題を出したのであります。

以上申したは聖德太子の十七憲法でありますが、常に言ふ如く親鸞聖人の御敎化は、此佛、法、僧の三寶を念佛の一つに收め、大悲の南無阿彌陀佛一つを頂く處に、三寶歸命の眞實味を御敎へ下されたが、吾が親鸞聖人の御敎化であります。處で話が漸次進んで參りますが、我々如來の御慈悲を聽き、佛の有難い事を聽聞する。一應きくと、何を聞いても皆な有難いのでありますが、信仰の上より言ふ時は、殊に有難い處を際立ちて頂かねば駄目なのである。抑々吾が、親鸞聖人が在來多くの佛敎が行はれて居る中に、殊に我が淨土眞宗をお建てなされたは何故であるか。之れ迄の佛敎、在來一般に頂かれ居る處にて充分ならば、何も特に如來の本願を著しく言ひ立て淨土眞宗をお開き下さる事は無いのである。けれども吾が聖人が特に淨土眞宗をお建て下された所以のものは、釋尊一代の御說法に於ける眞實の佛の惠み、即ち三寶歸命の眞實の所を御自身にお頂き下された味ひの上から、之て無ければ末代の我等惡人は救はれぬから、此の眞實のお慈悲を頂かせやうと、此の淨土眞宗をお開き下されたのであります。

今更斯る事改めて言ふ必要も無いのでありますけれど、御存知の如く親鸞聖人は、十九歲の時磯長の聖德太子の御廟に參詣して、夢の告げを得て道を求め、二十九歲の御時聖德太子の御導きて五條の橋の上にて聖覺法印に遇ひ、法然聖人の禪室に入りて、淨土眞宗の旨趣を御頂き下されたのである。

して見れば親鸞聖人の第一代は、凡て聖德太子の御手引きによりて、淨土眞宗をお開き下されたのであります。故に此の淨土眞宗なる宗旨は、淨土眞實の惠みを敎ふる宗旨、佛敎の眞髓、眞實の味ひを敎へて下されたが淨土眞宗なのである。て親鸞聖人の御心持を遠慮なく言ふならば、『述懷』の御和讃に

五濁增のしるしには、　この世の道俗こと〳〵く、
外儀は佛敎のすがたにて　內心外道を歸敬せり。
かなしきかなやこのごろの、　和國の道俗みなともに
佛敎の威儀をもとゝして、　天地の鬼神を尊敬す。

如何にもひどいお言葉であります。成る程佛敎の敎へは澤山ある、形に佛を拜み佛を禮する宗派は澤山あるも、皆な口に三寶歸敬を言ひながらも、其の實は外儀は佛敎の姿にて、內心外道を歸敬して居るものである。表面は佛敎の姿であるも。心は眞實三寶の惠みを頂く事稀れにして、形は佛敎なるも、心は外道であると言はれたのである。茲が即ち何よりの際立て所、茲が眞宗として實に肝腎の所なのである。

て親鸞聖人は『敎行信證』中『化身土卷』の中に、茲の所をお示し下されてある。能く氣をつけて頂かねばならぬのであります。曰く、

夫れ諸の修多羅に據つて、眞僞を勘決して、外敎邪僞の異執を敎誡せば……

修多羅は即ち經文のことであります。即ち諸の經文に據りてまことをまことならざる僞はりの敎との區別を明にし、僞はり異なれる外道の敎を誡めて言ふならば、と言ふのである。

……涅槃經に言はく、佛に歸依する者は終に更其の餘の諸の天神に歸依せざれと。……

眞に佛に歸依し、佛の惠みを喜ぶ者ならば、佛以外の諸の天神の敎に歸依する勿れとお誡め下されたのである。又次ぎには、

……般舟三昧經に言はく、優婆夷是の三昧を開きて學ばんと欲せん者は、自から佛に歸命し、法に歸命し、比丘僧に歸命せよ、餘道に事ふることを得ざれ、天を拜することを得ざれ、鬼神を祠ることを得ざれ、吉良日を視ることを得ざれ。……

之は蓮如上人の『御文』にもある所の御文である。此の佛法僧の三寶に歸命する故に、あとは何うでもよいかと言ふに、なか〳〵其處處では無く、眞に佛に歸し、法に歸し、僧に歸するものならば、此の外の他の道に歸命したり、心を寄せたり、認めたり、許したりする事は出來ぬのである。唯ひと筋に三寶に歸命するばかりが、佛の敎であつて、此の他の外道には事ふることを得ざれ、と言ふのである。

……又言はく、優婆夷三昧を學ばんと欲はゞ、天を拜し、神を祠祀することを得ざれ。

と。念佛三昧を學ぶ者は、天を拜んだり神を祀つたりしてはならぬと、言ふのであります。

二

さて親鸞聖人が此等の文を茲にお引きなされてあるは何であるか。此等は皆な經文にして、親鸞自分の思ひつきで無い。釋尊直き〳〵の御經のお誡めなる事をお示し下されたのであります。然らば釋尊何故之を嚴しくお示し下されたのであるか。茲が實に佛敎と外道との割れ目であるからであります。即ち天神地祇を禮拜するは印度在來の宗敎である。夫れと、夫れを捨てゝ三寶に歸すると、其の何れに歸するかゞ、即ち佛敎と外道との境ひ目である。茲が實に信心の上に於ては肝心な處にて、此所にて、一歩迷へば永劫の迷ひ、一歩踏み違がへると、爰に大なる東西の別を生ずるに至るのである。斯く考へると、此の佛敎の眞の味ひ、眞の眞宗の敎へ、眞の佛のお慈悲といふ處を、腹一杯頂かせ貰ふ事が何より大切になつて來るのであります。

處で茲の味ひは、右か左か別け無くてはならぬといふ丈けでは、また充分に分からぬのである。彌々之が眞に分かる時は何うかといふに、其の三寶に歸命する眞の味ひが腹一杯我々の心に頂けて、充分に滿足して、他の思ひも外の物も何も入らぬこととなり、眞實の佛のお慈悲が腹一杯に至り屆いて下された處で、初めて分からせて貰へるのである。淨土眞宗の人が、彌陀一佛の外に心を寄せることを雜行雜修と云ふ。設ひ彌陀を念じて居ても、計ひ心があつて、斯くあれがしと思ふは、之れも雜行雜修であると、仰せられてある事は誰も知つて居る所である。去りながら、之をすれば雜行になる斯く思へば計らひになる、之は雜修になるから仕てならぬと心て思ふてするは、まだ眞實に味ひが頂けたものでは無いのである。今三寶のお慈悲が腹一杯に頂け、心に充分入り滿ちて下された處は、南無阿彌陀佛のお慈悲ばかりとなるのである。

右も左も遣る瀨無き南無阿彌陀佛のお慈悲ばかりとなりてこそ、初めて茲の味ひは眞に頂かせて貰はれるのである。て何はさて措き、此の遣る瀨無きお慈悲を腹一杯に頂き、三寶の惠みに充分腹ふくらせて貰ふ事が肝腎である。茲の所が充分頂けぬと、理窟ても學問ても行かぬ。何人も茲さへ頂ければ此の味ひは分かるのである。蓮如上人の『御文』には、

それ八萬の法藏をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも、後世をしるを智者とすといへり。云云。

此の一段になると、我々心中に佛法僧の眞の味ひを腹一杯に頂きて、不足無く滿足させて貰ふことが一番肝要である。我々腹一杯に頂くと、外のものが欲しくならぬ。外にものゝ欲しきは、何處か心に不充分な所があるからである。內に色々他のものが雜りて來るは、腹一杯になつて居ぬからである。反す〳〵も腹一杯に三寶のお慈悲を頂く事が肝腎であります。

話が前に戻りますが、聖德太子が一代三寶を興隆なされて『勝鬘經』の講釋をなされた。其の時は大地一面に花びらが降つたと言ひ傳へて居る事でありますが、私は昨年御遠忌參詣の砌、其の御舊跡なる大和橘寺に參つて來ますした。其の『勝鬘經』の中に、此の三寶歸命の事をお說きなされてあるのであります。夫れは何うあるかといふに、佛に歸し、法に歸し僧に歸する、即ち三寶に歸命するのであるが、其の結局は佛に歸命する一つであると、お說きなされてあるのである。而して其の佛に歸命する上の一番肝要の處、即ち無限の慈悲を以て無限の衆生を救ふ、此の無限の佛のお慈悲を頂くが、眞に三寶の慈悲に歸命するものである、とお說きなされてあるのである。其の文は斯うであります。

世尊如來は限齋の時有ること無く住す。如來限齋無ければ、大悲も亦限齋無く、世間を安慰す。無限の大悲をもつて、無限の世間を安慰す是の說を作せば、是を善く如來を說くと名く。若し復說て無盡の法なり、常住の法なり、一切世間の所歸依なりと言はゞ、亦善く如來を說くと名く。是の故に、末度の世間、無依の世間に於て、後際と等しく、無盡の歸依を作すべし、云云。

即ち無限の慈悲を以て、無限の衆生を心中迄遺らず哀れみ照らして下さる、此の念佛無碍の南無阿彌陀佛の一道が、眞實我々の心に頂けた處が、眞の佛に歸依した味ひとなるのである。

さて茲の處が實に有難い處故、御同樣に茲を確かり頂かぬと分らぬのである。丁度一週日前の講話には、無碍といふ事に就き、お話したのでありますが、あの時は此の人生上より世間の煩惱惡業に支へられず、碍り無く救つて下さる佛のお慈悲のことを申したのである。去りながら同樣に又頂かねばならぬは、此の無碍の大悲の極りなく廣大のお慈悲である事である。佛の廣大のお慈悲はどのやうであるかと言ふに、甚だ出し拔けてありますけれども、『和讃』に

本願圓頓一乘は、　逆惡攝すと信知して
煩惱菩提體無二と、　すみやかにとくさとらしむ。

本願圓頓一乘とあるが、即ち南無阿彌陀佛の無碍の一道であ

る。本願とは大悲の親樣が私如き罪深き衆生を、飽く迄救はねばならぬとある、あなたの遣る願無きお心である。圓頓といふは、『愚禿鈔』に、

圓は圓融圓滿に名く。頓は頓極頓速に名く。

とあつて、圓融は「まるくとろける、」圓滿はまるく滿足するのである。如何に圓く融け、如何に圓く滿足するかといふに世に一つとして碍るもの無く、如何なる罪深き淺間しき者も飽く迄助け救はねば措かぬとある眞の佛の御慈悲の光が屆いて下さるなり、我々の煩惱も惡業も、雪や氷の如き我々の心も、其の淺間しく、仕て見やう無きが哀れと、呼んで下さる遣る願無き圓融圓滿の御心より照らされて、如來の御慈悲は斯く迄廣大の思召しなればこそと、其の頂く一念に、氷の如くこびりついてある我々の心も一邊に融ろけて、滿足して仕舞ふのである。之れが圓融圓滿である。世の惡思想の亡び、世の我慢の融けるも、之である。我々の不滿足の心の亡び、滿足を得るも之である。此の佛の遣る願無き圓融圓滿無碍のお光に照らされて、其のお心の淺間しき我々の心に屆いて下さる一念は、圓融圓滿、南無阿彌陀佛と頂く外は無いのであります。

其處で、今日は初めより『化身土卷』を申したのでありますが、親鸞聖人の御敎化の『化身土卷』と『行卷』とは、裏と表とである。表より言へば『化身土卷』、裏より言へば『行卷』である。『化身土卷』は、佛法僧の三寶に歸命する一つが眞の佛法であるぞよ、外の道にそれてはならぬぞよ、と表よりお示し下さるのである。夫れを裏より夫れは唯南無阿彌陀佛の一道であるぞとお示し下されたが『行卷』故に『行卷』の南無阿彌陀佛の御敎化を、腹一杯に頂く時は、『化身土卷』の御敎化はおのづから出て來るのである。

又『行卷』の御文には

然るに本願一乘海を按ずるに、圓融、滿足、極速、無礙、絕對不二の敎也。

實に有難きお言葉である。皆樣は種々の御緣により、斯く道を求めて茲にお集り下されてありますが、實に此の我々の心中に、廣大のお慈悲を頂かせ貰うた味ひは、心にも言葉にも絕え果てた事にて、信樂開發の一念、此の遣る願無きお慈悲の屆いて下された時は、有りと有るもの、一時に皆な融かされ、氷の旭日に融けるが如く、一時に心にお慈悲が充ち滿ちて下さるのである。夫れが圓融、滿足、極速、無碍である。滿足といふは、何處に一つの缺け目が無い故滿足である。極速といふは、段々聞いてる其の中に、といふのでは無い、聞く一念に、頓極頓速である。無碍とは、どんなものがありても、障りにならぬ。斯く頂く一念に、一點の不足なく有りと有るもの皆な融かされ、頓極頓速に得られるお慈悲故圓融、滿足、極速、無碍、絕對不二の敎とお示し下さる。幾くつもあるなら、絕對不二では無い。三世十方の諸の如來も唯此の一つの敎を、有難き敎である〳〵とお勸め下さるのである。我々南無阿彌陀佛々々々々と念佛を稱へさせて貰へば、三世十方の如來は、此の念佛の中より現はれて、其の者を讃歎し、證誠護念して下さるが、此南無阿彌陀佛である。故に此の南無阿彌陀佛は、絕對不二の敎である。夫れを今の『和讃』には「本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提體淨二と、すみやかにとくさとらしむ」とお示し下されたのであります。

三

殊に此の頓極頓速が有難いのであります。皆樣が此の法を聞いて下さるにしてからが、今迄少しも聞いた事の無い方が佛の廣大のお慈悲をきくなり、不意に信仰にお入り下さるのである。現に此間も、無碍の講話の時、聞いてお出て下された方で、伊勢より態々お出下された御婦人がある。其の方は三重郡の川島といふ所よりお出下されたのでありますが、承れば三年以前より『求道』をお讀み下され、何うか安心仕度いと、三年以前より今東上すれば聞けるか〳〵と思つてお出下されたのだ相であるが、彌々此の度びあたりへは御本山參りと言ひ立て、御主人丈に事情を打明け御願ひして、御上京下されたのである。處が私は、前回の講話の時の如き、一時間餘も皆樣をお待たせしたやうの有樣にて、近頃は少しく多忙に暮して居るもの故、充分にお話して居る暇が無い。併し此の法を說く事丈けは、如何に忙がしくても止めぬようにと考へて、出來得る丈けは續けさせて貰うて居る。で講話の翌日は麴町の或る所へ話しに參らせて貰らひました。

それは或る御熱心なる方より自分の親族の者が昨日電話をかけて、『法話』といふ雜誌を見ると、唯如來にすがるばかり也といふ事が書いてあつて、夫れを見てから不審が立ち、居ても立つてもじつとして居られぬ。出て伺ひ度いのであるけれども、家の都合で出られぬと言ふから、お忙がしい處を甚だ濟まぬがといふ立つての御賴み、夫れで出かけて行つたのであります。まだ年若き御婦人なるも、法のお心掛け非常に深く、法話を見ると、香樹院德龍師のお話が出てあつて、其の御話に、述べて〳〵述べ切つた揚句に一句「あゝ有難やと如來にすがるばかりなり」とある。此の「すがるばかり也」に行き詰つて仕舞うて、心配に堪えられぬ、といふお話である。此の時今の伊勢の方も一緒にお連れして行つたのであります。で私は今の方に段々とお話した。「あなたの思うて居られる「すがる」は恐らく斯うだらうと思ふ。あなたの思うて居らるゝ「すがる」は、何うか此の淺間しき自分に同情して下さる佛に遇ひ度い、喜び度い、求めすがり度い、と言ふのだらうと思ふ。すると茲に書いてある香樹院師の「すがる」とは「すがる」が違ふのである。違ふけれども今あなたが、其の爲めに此の「すがる」の言葉に眼のついたが御緣である。あなたは常に此方がすがる心に成り度いと思うて居らるゝもの故、茲の「すがる」の文字に目がつき、何うすがるのであるかと心配になつたのであるが、あなたは佛がまだ眞實自分の胸の中を御存知無いと思つて居るのであらうが」と其の方の心を指しつけ、「佛は疾くより其の仕樣の無い者を目をつけ、其の仕樣の無いのが可哀相であると、向ふ樣よりすがる斗りに仕て置いて下されてあるのだから、其の廣大の思召しを頂けば、此方はいやてもすがらざるを得ぬて無いか」と申し、又伊勢の方とお二人に向ひ、「あなたも今迄眞宗の說敎を聽き、耳慣れて居らるゝもの故、言葉の上では眞宗の御安心に滿つて居るも、

何うも心に眞に佛のお慈悲が受けられぬ。此方から佛のお慈悲にすがる積りて居る故、美しく頂けず、「すがる」の文字に眼がついたのてある」とお話申して來たのてあります。

猶ほ其の時も、先の講話にも申した如く、兎角我々日常の日暮しは、此方から人に善くするのてある、此方よりあーするのてある斯うするのてあると、色々に思へども、實際に自分が人に善くする事が出來るかといふに、出來ず、人に何程滿足を與へ度いと思うても、滿足を與ふる事が出來ぬのてある、幾ら此方より惡心を止めやうと思ふても止まず、隔て心は去らぬ、斯くあーかうと思ひつゝも、眞に安心が出來ぬは何故てあるかと言ふに、我々斯く胸の中に色々と心を苦しめて居る、其苦しむ心を持つて居る我々の胸中を、眞に知つてゝ呉れる人一人も無いと思ふて居るからてある、と此事も申して來たのてある。實に茲てあります。皆樣も同樣て、人間は誰てもどんな事ありても自分の胸一つて善くして行けると思ひつゝ、疑ひの心起り、隔ての心の起つて來るが、我々の淺間しき心てある。人に對し友に對し、此方より胸を開きて、善くして行く事が出來るならよきも、夫れが一つも出來ぬ。其の出來ぬ仕樣の無い者を、此の苦しむ心の中を、誰か知つてゝ呉れる者は無いか。此の淺間しき胸の中を、誰か打融けて聞いて呉れる人は無いか。自分より打明ければよいとは承知して居るけれど、夫れが自分の方からは、迚も出來ぬ私てある。其の私の苦しい心を知り扱いて、誰か向ふより打ち融けて自分に向つて呉れる人は無いか。自分の惡い事は十も二十も承知しながら、夫れが止まぬて苦しんて居る私てある。此の私に向ひ、汝惡を止めよと言はれても、夫れは止まらぬが其の止まぬのが可哀想てあると、其處を哀れんて、涙を寄せて呉れる同情者は無いかと、人生詰まる處は、唯此の一點となるのてある。而して今他力の仰せが茲なのてあります。

今阿彌陀如來のお慈悲は何うかと言ひますに、即ち其處てある。其の淺間しき、惡しき根性の止まぬ私を御覽下されて、阿彌陀佛の親は何と仰せ下さるかと言ふに、此方が、自分の心はこんなに惡るい、之ては迚ても仕樣が無いと言へば、夫れて行ける位なら、五劫永劫の苦勞はせぬぞと言つて下さる。座禪戒行勤めよと言はれても、一つも勤まらず、善根功德積めと言はれても、一つも積む事は出來ず、行きも戻りもならぬ凡夫の私。其の爲すべき座禪戒行は行へず、起す可らざる隔て心はいつ迄も止まず、す可き親孝行は一つも出來ぬ私を、佛は如何に思召し下さるか。『正信偈』には、

矜哀定散與逆惡

「定散と逆惡とを矜哀する」、又

憐愍善惡凡夫人

「善惡の凡夫人を憐愍する」――其の出來ぬ處が哀れ、可哀想だと言つて下さるのてある。世の岩をも通し、鐵をも融かす水は、他に在るのては無い。此の遣る瀨無き大悲の思召し一つてとろかして下さるのてある。此の遣る瀨無き思召しは、唯徒らに御經にある文字、聖敎にある文句か。

聖人の常の仰せには、彌陀の五劫思惟の願を案ずればひとへに親鸞一人がためにて候ひけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける

本願のかたじけなさよ云云。(歎異鈔)

此の五劫の思惟は、徒らに紙上に連らねてある文字か。永劫修行は、眞宗の說敎に附きものゝ文句か。十方の衆生が悉く邪なる道に趣き、空しく地獄に墮つるを御覽下された時、大悲の親は何のやうに御苦勞下されたてあらうか。「彌陀の五劫思惟の願を案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲めなりけり。」親鸞聖人は決して此のお言葉を、輕ろ〳〵と仰せ下されたのては無い。法然聖人の『選擇集』の段々の御敎化を頂いて、此の五劫思惟の御本願て、往生の一大事を御決得下されたからてあります。

さて其法然聖人の御敎化は何うてあるか。『選擇集』のお示しが、唯南無阿彌陀佛を稱へよとある丈けならば、法然聖人は流罪にお遇ひ下さる事は無かつたのてある。抑々佛敎渡來の昔より、佛を拜まず、南無阿彌陀佛を稱へぬ御宗旨は一つも無い。若し夫れ丈けてよきならば、法然聖人何も心を痛めて選擇本願をお唱へ下さる事は無かつたのてある、けれども、此の戒行出來ず、座禪出來ぬ私故、外の敎えては迚も仕樣が無い。其處を御覺下された故、選擇本願南無阿彌陀佛の法然聖人の御敎化が出て來たのてある。法然聖人が一向專修てある、唯念佛一つてあるとお敎え下されたは、自餘の敎法ては我々何程思ひても、力及ばぬ事を御覽下されたからてある。茲が實に阿彌陀如來の廣大なる御本願の涙のもと、茲の處を能く頂かせて貰はねばならぬのてある。『歎異鈔』の御言葉には、

おほよそ惡業煩惱を斷じつくしてのち……煩惱を斷じなばすなはち佛なり。佛のためには五劫思惟の願その詮なくやましまさん。

五劫の思惟を慢然紙上の文字と見過してはならぬのてある。五劫の思惟は、阿彌陀佛親樣の、其の何れの道でも仕樣の無い其の者をとの、遣る瀨無きあなたの御親心の御苦勞なのてある。法然聖人が『選擇集』にお示し下されたも、之をお示し下されたのてある。法然聖人一代の御敎化の肝腑は、要するに、唯この一つ、親鸞聖人が淨土一門中、特に一向宗と世間より言はるゝ迄、此の念佛一道を際どくお示し下されたも實に此の故てある。法然聖人『選擇集』の御敎化には宣はく、

第十八の念佛往生の願とは、彼の諸佛土の中に於て、或は布施を以て往生の行と爲すの土有り、或は持戒を以て往生の行と爲すの土あり、或は忍辱を以て往生の行と爲すの土あり、或は精進を以て往生の行と爲すの土あり、或は禪定を以て往生の行と爲すの土あり、或は般若を以て往生の行と爲すの土あり、或は菩提心を以て往生の行と爲すの土あり。或は六念を以て往生の行と爲すの土あり、或は持經を以て往生の行と爲すの土あり、或は持咒を以て往生の行と爲すの土あり、或は起立塔像飯食沙門及び孝養父母奉事師長等の種々の行を以て、往生の行と爲すの土あり。或は專ら其の國の佛名を稱して往生の行と爲すの土あり。此の如く一行を以て一佛土に配するは、是且く一往の義也。再往之を論ぜば其の義不定也。或は一佛土の中に多くの行を以て、往生の行と爲すの土あり。或は多佛土の中に、一行を以て往生の行と爲すの土あり。是の如く往生の行種々不同

家り。易さに述ぶ可らず。即ち今前きの布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨てゝ、專ら佛號を稱するを選び取る故に選擇と云ふ也。

茲の處が『選擇集』の御敎化の肝腎の處である。猶ほ續いて、若し夫れ造像起塔を以て本願と爲さば、貧窮困乏の類は定めて往生の望を絶たん。然に富貴の者は少く、貧賤の者は甚だ多し。——

造像起塔を以て往生の本願と仕て下されたら、貧乏な者は御助けに預れぬ事になつて仕舞ふ。

——若し智慧高才を以て本願と爲さば、愚鈍下智の者は定めて往生の望みを絶たん。然るに智慧の者は少く愚癡の者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願と爲さば、少聞少見の輩は定めて往生の望みを絶たん。然るに多聞の者は少く少聞の者は甚だ多し。……

世の中に、學問智慧のある者は少く、無い者は非常に多い。然れば智惠學問を以て往生の本願と仕て下されたら、智慧學問の無い者は、お救ひに洩れる事になつて仕舞ふ。

——若し持戒持律を以て本願と爲さば、破戒無戒の人は定めて往生の望みを絶たん。然るに持戒の者は少く破戒の者は甚だ多し。自餘の諸行之に准へて知るべし。

而して次に

當に知るべし、上の諸行等を以て本願と爲さば、往生を得る者は少く、往生せざる者は多からん。然れば則ち彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催うされて、普く一切を攝せんが爲めに、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と爲さず、唯稱名念佛の一行を以て其の本願と爲たまへり。と

之が法然聖人の南無阿彌陀佛の念佛一つの御敎化なのである。念佛稱へ度き者は、念佛稱へるがよい、外の行仕度ければ、外の行を仕てもよいと云ふのなら、何も法然聖人際立て南無阿彌陀佛をお說き下さる用は無いのである、茲の處が實に法然聖人の御敎化の肝腎で、法然聖人は實に此の爲め七十五歲の御時、讃岐の鹽飽島に御流罪にお遇ひ下されたのである。外の行でゆき度き者は外の行でゆくがよい、念佛稱へ度き者は、茲に彌陀の本願念佛があるから、といふ御敎化なら、御流罪にお遇ひ下さる事も何も無つたのである。法然聖人の御流罪は、其の何れの行も及ばぬ仕て見樣なき罪業深重の者が、此の親樣の南無阿彌陀佛一つで救はれるのである。と茲を隱さず、常に打出してお示し下されたからであります。

其處で先程の和讃に「本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して」——逆惡攝すは、此の親樣の親心で無くては可かぬのである。我々世間一通りに善い事を爲よ、立派にやつて行かうと思ふたつて夫は我々には追つ付かぬ。夫を仕やうと思ふたつて自分に夫れが出來ぬ位な奴でなく、自分は實に罪業深重の逆惡の者なのである。此の逆惡とは實に自分の事なるに、氣が就かねばいかぬのである。其の彌々仕て見やうなき自分を「逆惡攝すと信知して」—— 此の者に此程廣大の思召しをお知らせ下さる御苦勞なりしかと頂けば、「煩惱菩提體無二と、すみやかに疾くさとらしむ」——此の煩惱罪惡の者、夫が捨てられぬとの廣大のお慈悲なりしかと頂けば、此の罪惡深重の私が自分で一分一厘煩惱を取るて無けれども、眞のお慈悲に照らされて、

無碍光の利益より、　　威德廣大の信をえて、
かならず煩惱のこほりとけ、すなはち菩提のみづとなる。

煩惱の水がいつの間にか、信心の水と轉じかはつて下さる。之が他力信仰の難有き味ひであります。

四

話が色々になりますが、先日二月十五日には、麻布の曹洞宗の學校の涅槃會に參つて、話させて貰つて來ました。其時は、私共は他力の本願を頂かせて貰ひ、又曹洞宗等の方々は自力の味ひを聽かれるの故、道は異なるも矢張り一釋尊の道を頂くの故、結局は此の涅槃の一味の味ひを頂かせて貰ふのである。佛敎は一つ故、我々は他力より行き、皆樣は自力より進まれ、道は違ふも、結局至らせて貰ふ處の味ひは一つである。去りながら我々は自力では及ばぬ故、他力のお慈悲を仰ぐのであると、申して來た事であります。話が段々混雜しますが、其の歸りに思ひ付いて、麻布の千野といふ方の處に寄りました。此の方は度々死にかけて私にお聞き下されたのであるが、中々御安心が出來無かつたのである。丁度三週間程前に漸く大草師の信仰に入られた時の御話して、お喜び下されたのであります。此日は涅槃會故、不圖思ひつきて、其の御病床にて『御文』を拜讀する、と 即ち

文明六、二月十五日夜、大聖世尊入滅の昔をおもひいて、
於二燈下一拭二老眼一染二筆畢ぬ。滿六十御判

とある、二帖目四通目の實に有難き『御文』である。殊に此の御文の有難き處は何處にあるかと言ふに、曰く、

されば五道六道といへる惡趣にすでにおもむくべきみちを、彌陀如來の願力の不思議として、これをふさぎ給ふなり。このいはれを、また經には、橫截五惡趣、惡趣自然閉ととかれたり。かるがゆへに、如來の誓願を信じて、一念の疑心なき時は、いかに地獄へおちんとおもふとも、彌陀如來の攝取の光明におさめとられまいらせたらん身は、わがはからひにて地獄へもおちずして、極樂にまいるべき身なるがゆへなり。云云。

此の御敎化の上より頂くと、即ち佛の廣大な御本願は、我々地獄に行かんとする者を、願力の不思議として、墮してはならぬと防ぎ抱えて下さる遣る瀨無き御念力御誓願力なのである。此の廣大の御本願力なればこそ、

若不生者のちかひゆへ、　　信樂まことにときいたり、
一念慶喜するひとは、　　往生かならずさだまりぬ。

と、遂に我々の淺間しき胸の中に其の廣大なる親心が屆いて下さるのである。之が今の「本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して」と頂いた處、茲の味ひは口にも言葉にも言ひ盡くす事は出來ぬのであります。

又最初伊勢の方に就き話しかけて、話が中途になつて居りますが、先きに申す如く御同道して麴町の方の處に參り、佛は其の遣る瀨無き親心より、我々の心の底の底迄見拔いて、其の者を見捨て給はぬお慈悲であると御話申すなり、麴町の方も涙を流してお喜び下され、伊勢の方も遣る瀨無き如來のお慈悲に滿足して、二、三日前國に歸られたやうな次第であり

ます。

實に斯く佛のお慈悲を腹一杯頂かせて貰ふと、「本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとらしむ」實に此の、佛のお慈悲を腹一杯頂かせ貰ふ事が、眞の佛法である。初めに申した聖德太子の十七憲法も之にて初めて分かるのである。「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧也。則ち四生の終歸萬國の極宗なり云々。」有りと有る者此の慈悲を腹一杯頂きて、腹ふくるゝに非らざれば駄目なのである。生きとし生ける者、此の遣る瀬無き思召しを充分に頂く處で、初めて滿足が得させて貰へるのである。有りと有る國も、此お慈悲を充分に頂くに非ざれば、國家の眞の精神は現はれ來らぬのである。此のお慈悲が普く國中行き渡り、國民悉く眞の滿足を得させて貰ふ處で、初めて天下和順し、日月清明にして、風雨時を以てし、災厲起らず、國豐かに民安らかなる境域も得させて貰らへるのである。『現世利益讃』には宣はく、

阿彌陀如來來化して、　息災延命のためにとて、
金光明の壽量品、　ときおきたまへるみのりなり。
山家の傳敎大師は、　國土人民をあはれみて、
七難消滅の誦文には、　南無阿彌陀佛をとなふべし。
一切の功德にすぐれたる、南無阿彌陀佛をとなふれば、
三世の重障みななから、かならず轉じて輕微なり。

何れを頂くも、今申す南無阿彌陀佛の一つであります。

一體人間同志でも、人が此の絶對無碍の遣る瀬無きお慈悲に滿足して、世の善し惡しも忘れ、一筋に難有く喜ばるゝ有樣を見る時には、誰でも其の無碍滿足の有樣に心融ろかされぬ者は無く、皆な一樣に「あゝ有難い」と同じ喜びに打たれて仕舞ふのである。人間同志でもかうである。況して

心だにまことの道にかなひなば
いのらずとても神やまもらん。

十方三世の有りと有る薩埵が、私の此の大悲に滿足し喜ぶ樣を御覽下された時は、其の遣る瀬無きお意の中に、御滿足の思ひは如何斗りであらう。我々人が苦しみて信仰を求め、信仰を得、滿足して喜ばるゝ聲聞いてさへ、吾が事の如く有難く思ふのである。殊に況や五劫永劫の苦勞をして我々に此の吾が親心を屆け度いと思召し下さる親樣が、我々がそのお心を初めて頂いて、あゝ有難いと喜ぶ有樣を御覽下さる時は、如何に思し召し下さるであらうか。『和讃』に

金剛堅固の信心の、　さだまるときをまちえてぞ
彌陀の心光攝護して、　ながく生死をへだてける。

大悲の親樣は十劫のむかしより、我々が此のお慈悲の親樣に氣の附くを、今か〳〵と待ち詰めにして居て下されたのである。五劫の思惟と言ふも、之れを頂かせ度い斗りで五劫の思惟、永劫の修行といふも、之れを我等の胸に屆け度い斗りに、長々苦勞して下されたのである。法然聖人『選擇集』の中には、

彌陀の光明餘行の者を照らさず、唯念佛の行者を攝取したまふの文。

とあつて、

觀無量壽經に云はく、無量壽佛に八萬四千の相あり、一々の相に八萬四千の隨形好あり、一一の好に復八萬四千の光明あり、一々の光明遍く十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。

此の文をお引き下され、次ぎに如何にお示し下されてあるかと申すに、

觀念法門に云く、又前きの如きの身相等の光、一一に遍く十方世界を照すに、但阿彌陀佛を專念する衆生のみ有り、彼の佛の心光常に是人を照して、攝護して捨てたまはず、總へて餘の雜業の行者を照攝することを論ぜず。

即ち阿彌陀佛の大悲は、餘善餘行の雜業の者を攝取して下さるのでは無くて、專ら南無阿彌陀佛を頂く者のみを、佛の心光中に攝め取つて下さるのである。之は實に其の筈にて、抑々佛の廣大な思召しは、此の罪惡の者をこそ救ふ爲に南無阿彌陀佛を御成就して、長々御待ち兼ね下されてあるのなれば、其の廣大な思召しを頂かずして、例ひ念佛を稱へて居るにしても、自分の勵み心で念佛を稱へたり、餘の觀念座禪を仕て居るのでは、大悲の御心に叶ふ可き事は無いのである。然うでは無くて、私如き此の仕て見樣無き者を救ふ爲めに、長々御苦勞下されたるお慈悲にてましますと、唯佛のお慈悲のみ有り難く、大滿足させて貰ふ處で、大悲の親樣はあなたのお光明中に、攝取不捨の御利益を蒙る身として下されるのである。餘の雜業雜善の人には、攝取光明の事、無い筈なのである。阿彌陀佛のお慈悲のもと、お目當てが、我々の仕樣の無き罪惡の者に、此の廣大の我が親心、南無阿彌陀佛を屆けてと言ふのである。茲の御本願の抑々の御本意が大切であります。又彌陀の誓願不思議にたすけられ參らせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛申さんとおもひたつ心のおこるとき、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。云々。

此の遣る瀬無き御心、南無阿彌陀佛を頂き、あゝ有難やと念佛申さんと思ひ立つ心の起る時、攝取不捨の御利益には預けしめ下さるのである。要する處、あなたの遣る瀬無き此の親心一つを頂く、是丈けであります。

さて斯く段々頂き來れば、此の御信心頂くは更に六かしい事では無い。六かしいは、頂く自分の頂き心に力を入れるから六かしいのである。此方から思案分別して了解するのでなく、親の方より之程迄に思惟分別して私に向つて廻向下されてある其處を頂くと、夫れ切りなのである。大悲の私の爲めに此の親心を屆けようと御苦勞下されてある事は、

假令身を諸の若毒の中に止くとも、我精進を行じて、忍びて逐に悔いじ(大經)

と、之程の御苦勞、御念力なのである。此の遣る瀬無きあなたの願力念力を承はれば

本願力にあひぬれば、　むなしくすぐるひとぞなき、
功德の寶海みち〳〵て、　煩惱の濁水へだてなし。

之を聽く者、一人も空しく過る者なく、一人も滿足せぬ者は無く、我々胸中の煩惱惡業の濁りの水も、如來のお慈悲の法の水の爲めに、其の儘廣大の功德の水とかはつて下さる、實に廣大の佛の思召し、佛のお慈悲である。此の一念に、我々心中の煩惱惡業の根切れがし、久遠劫來の無明業障の罪咎も、底の方から解け、我々有碍相對のゴチ々々した心も佛の無碍絶

對の心の爲めに融かされ、心の中に十二分の滿足を頂いて喜ぶ有樣は、外に申さん言葉も無く、唯聲に現はれて南無阿彌陀佛々々々、感謝の稱名、御恩報謝の御念佛斗りである。『御文』の中には、

一念をもてば往生治定の時刻とさだめ、その時の命のぶれば自然と多念に及ぶ道理なり。

この聞えて下された一念が、往生治定、即得往生である。而して息ある限りは、此の往定一定の思ひより、南無阿彌陀佛々々々と、死ぬ迄此の報謝の稱名の外は無いのであります。

五

さて斯くの如く大悲の佛は、我々のお慈悲頂くを斯く迄もお喜び下され、心光中に攝め取つて其者を喜び護つて下さる。此の廣大の大悲を我々頂き佛のお喜び下さる有樣は、大悲の親樣を初めとして、六方恒沙の諸佛如來が、皆な大に滿足し深くお喜び下さるのである。第十七願の文には、

設ひ我佛を得んに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我が名を稱せずば正覺を取らじ。

と。斯くの如く本師法皇の阿彌陀佛の御本願より現はれて、阿彌陀佛の大悲をお勸め下さる諸佛如來故、我々が此のお慈悲を一念有難いと頂けば、本師本佛の大悲の親樣は、勿論其者を喜んで御讃め下され、又各廣長の舌相を出し、三千大千世界を覆ふて、普く此のお慈悲をお勸め下された諸佛如來も此の頂く一念に護念證誠と、其者を此度は護念して下されるのである。啻に三世十方の諸佛がお護り下さるのみでなく、初めに申した通りで、佛法僧の三寶に歸命する者は、餘の天地を拜する事勿れ、鬼神を祀ること勿れで、天神地祇に心を掛けるで無けれども、天神地祇も此のお慈悲頂く者を喜び護り、敬し養育し下さるのである。『現世利益讃』には、

南無阿彌陀佛をとなふれば、この世の利益きはもなし、
流轉輪廻のつみきへて、　定業中天のぞこりぬ。
南無阿彌陀佛をとなふれば、　梵天帝釋歸敬す、
諸天善神こと〳〵く、　よるひるつねにまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、四天大王もろともに、
よるひるつねにまもりつゝ、よろづの惡鬼もちかづけず。
南無阿彌陀佛をとなふれば、堅牢地祇は尊敬す、
かげとかたちとの如くにて、よるひるつねにまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、難陀跋難大龍等、
無量の龍神尊敬し、　よるひるつねにまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、炎魔法王尊敬す、
五道の冥官みなともに、　よるひるつねにまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、他化天の大魔王、
釋迦牟尼佛のみまへにて、まもらんとこそちかひしか。
天神地祇はこと〳〵く、　善鬼神となづけたり、
これらの善神みなともに、　念佛のひとをまもるなり。
願力不思議の信心は、　大菩提心なりければ、
天地にみてる惡鬼神、　みなこと〳〵くおそるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、觀音勢至はもろともに、
恒沙塵數の菩薩と、　かげのごとくに身にそへり。
無碍光佛のひかりには、　無數の阿彌陀まし〳〵て、

化佛おの〳〵こと〳〵く、　眞實信心をまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば、十方無量の諸佛は、
百重千重圍繞して、　よろこびまもりたまふなり。

斯くの如く、南無阿彌陀佛を頂き喜ぶ者を、天地諸の神冥は讃歎し、其者を晝夜に御護り下さるのである。又『觀經』の終りには、

念佛者は當に知るべし、此の人は是れ人中の分陀利華なり、觀世音菩薩大勢至菩薩は其の勝友と爲りたまふ。

と御賞め下され、又善導大師は、其者を、妙好人、好人、希有人、最勝人とお示し下され、又親鸞聖人は其者を眞の佛弟子とお知らせ下さるのである。

段々斯く頂く時は、實に極り無き一向專修の御敎化であります。聖德太子のお示し下された三寶歸命の敎も、斯く頂く時は此外には無いのである。先きにも申す如く、法然聖人の御流罪も、茲一つをお知らせ下されたが爲めである。故に親鸞聖人は『化身土卷』の畢りに、此の、聖人御流罪の事をお書きなされてあるのである。曰く、

竊に以れば、聖道の諸敎は行證久しく廢れ、淨土の眞宗は證道今盛なり。然るに諸寺の釋門、敎に昏くして眞假の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷つて、邪正の道路を辨ること無し。……

聖人の當時の佛敎者達も、今と同じく眞實の敎と、假の敎との區別が薩張り分らず、又學者達も正しき敎と、邪なる敎との別が分かつた者が無つたのである。

……斯を以て興福寺の學徒、太上天皇（御鳥羽の院と號す諱尊成）今上（土御門の院と號す、諱爲仁、）聖曆承元丁卯の歳、仲春上旬の候に奏達す。……

遂に法然聖人を初め、親鸞聖人以下重立ちたる念佛の人達を朝廷に奏問して、一向專修の道に仇をする事になつたのである。

……主上臣下法に背き義に違し、忿を成し怨を結ぶ。茲に因て眞宗興隆の大祖源空法師、並に門徒數輩、罪科を考へず猥はしく死罪に科し、或は僧の儀を改めて姓名を賜つて遠流に處す、予は其の一なり。爾れば已に僧に非ず俗に非ず、是の故に禿の字を以て姓と爲す。空師幷に弟子等諸方の邊州に坐して、五年の居諸を經たりき。云云。

即ち吾が親鸞聖人は、頭を剃り禿となり、自ら愚禿と名乘りて、御流罪五年の御苦勞があつたのである。吾が聖人の御流罪は、三十五の御時より三十九の御歳迄で、夫より五十二歳稻田御草庵にて『御本書』御製作迄、諸方を御經廻御苦勞があつたのである。而して其の御苦勞の結果、惡逆攝取の他力眞宗の御宗旨が出來上つて下されたのである。て流罪の厄にお遇ひなされて、而も親鸞聖人は如何に仰せられるかと言ふに

大師聖人もし流刑に處せられたまはずば、我又配所におもむかんや、もしわれ配所に趣かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん。

是猶ほ師敎の恩致なり。

流罪に遇ひたればこそ、斯る邊鄙の群類に、此の廣大なお慈悲を告げ知らす事が出來たのであると、之に就けても御師法然聖人の御恩をお喜びなされたのである。茲が實に肝腎の處此の淨土眞宗のみ敎えが開かれたは、此の御流罪がもとなの

てある。斯く言へば妄りに私の計らひをつけ、恐れ多い事を申すやうなれども、蓮如上人東山にお出ありし時、あちらこちらと御住居が定まらず、人々此所彼所と捜しても見當らぬ。金森の善從が漸くの事にて尋ね當て、御目にかゝられると、上人はえらく御難儀してお出でになる樣子である。此の時善從定めて悲しまるゝ事と思ひきや。

あらありがたや、早や佛法はひらけ申すべきよし申され候。終に此の詞符合候。云云。(御一代記聞書)

御流罪によつて、淨土眞宗は開けて下されたのである。又おなじく『御一代記聞書』に

前々住上人善の事を仰せられ候。未だ野村殿御坊、その沙汰もなきとき、神無森をとをり、國へ下向の時、興よりおりられ候て、野村殿の方をさして、此のとほりにて佛法がひらけ申べしと申され候ひし。人々、是は年よりて、かやうのことを申され候など申ければ、終に御坊御建立にて御繁昌候。不思議のことゝ仰せられ候ひき。云云。

此の處にて佛法が開けると言はれたので、人々變な事言はれると思うて居たら、遂に其の通り其の處にて御坊建立されたと言ふのである。實に此の間の味ひを頂くと、先程申す如く有りとする天神地祇をはじめ、三世十方の諸佛菩薩皆な一樣にお護り下さる御信心故、善きに就け惡しきにつけ諸種の御緣が因となり、一切諸佛の護念に因つて、段々一切衆生の心に屆くやうに佛法が弘まつて下さるのである。斯くの如く頂くと今日皆樣御一人々々々が、此のお慈悲をお喜び下さる事は、やがて十人二十人の人のお頂き下さる基ひである。而して漸次斯くの如くして、國中殘らず此のお慈悲に滿足させて貰ふ事が、實に聖德太子が「篤く三寶を敬せよ」と詔り下された御本意である。て我々此のお慈悲を頂く上からは、此の親鸞聖人のお示し下さる眞の如來のお慈悲を日常生活に味はして貰ひ、何事も此の佛のお慈悲ばかりと喜び、猶ほ一人にても、世上の人が此の遣る瀨無き思召に早く氣づかるゝやうつとめ度い事であります。南無阿彌陀佛々々々。(二月二十五日三教會合の日)

唯佛一道

(求道學舍日曜講話)

近角常觀

今日の題は『唯佛一道』と申す題を出しました。これは何處から來た言葉かと云ふに、善導大師の法事讃の中から來た御文であります。曰く

九十五種みな世を汚す、唯佛一道のみひとり淸閑也

親鸞聖人が之を御本書に引き、信卷の下に出ております。今日は此唯佛一道のありがたき御言葉につきてユル〳〵御話致しませう。我々南無阿彌陀佛と喜ぶ淸らかな閑かな味が、南無阿彌陀佛の一道であります。實に云ふに言はれぬ難有き御言葉で、我々南無阿彌陀佛〳〵と口に御慈悲を喜こばして貰ふ靜かな趣、何とも云ふて見やうなき難有き極である。之は御本書信卷に眞佛弟子と云ふことがかいてありまして、この眞の一道を明かにかいてある。即ち眞と云ふ言葉は假に對し僞に對する言葉である、僞と云ふことは九十五種の邪道でありまして、假とはおなじ佛敎のうちでも聖道門自力の敎であります。唯此佛の一道ばかり信ずるものが眞の佛弟子である、この眞の味を知らせる爲に御開山聖人が善導大師の御言葉を引かれてあるのであります。そして其引續きに皆さんもよく御承知の聖人の悲歎の御言葉が出ております。

悲哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して定聚のかずに入るを喜ばず、眞證の證に近づくことをたのしまず、耻づべしいたむべし。

とあります。悲哉愚禿親鸞はまことに淺ましきものである。其淺ましきものを見捨てぬは、たゞ佛の御慈悲ばかりである、こゝが眞宗の眞宗たる處、佛敎の佛敎たる處である。此ありがたき佛の御慈悲を頂きながら自分をふりかへりみれば、たゞ愛欲、名利の淺ましき、罪惡だらけである、實に耻づべきことである。此御言葉の上て知らせて貰はねばならぬことがある。これはかうであります。夫は愛欲の廣海に沈み、名利の大山に迷ふものを佛が見捨てられぬ。これが佛の大悲である。如此淺ましき根性の絕へぬ、丁度涅槃經にある阿闍世王の如く、親も殺し、佛に逆き五逆極まる人間、六種外道の人が種々に手を代へ品をかへて、說けども安心が出來ぬ、遂に耆婆に導びかれて、佛の御說法を承つた處、其者を見捨てぬぞ、汝罪あらば佛亦罪がある、その故は汝が、父頻婆沙羅王を敎したのは王位を得んが爲である。其王位を父王が得られしは昔、さま〳〵の佛を供養して其功德で王に生れたのである、されば王位の爲に殺されたは、佛が其供養を受けたからである、佛若彼の供養を受けなかつたら、父は王と生れなかつたであらう。されば汝罪があるなら、佛亦罪がある。汝地獄に行かば佛亦行くであらう。かくの如く深きお慈悲の思召で阿闍世王の樣な罪のものが、我の如き淺間しき者を見捨てぬ御慈悲と承りて、始めて難有いと安心しました。此處が實に肝心であります。この處を皆さんに頂いて貰はねばならぬ。大抵こゝに來聽せらるゝ方で、自身何卒信仰を得たいと思はぬ人はなけれども、多くの方がまだ安心出來ぬは何處かと云

ふに、自分の淺間しき心、人の助けなく、情けないのが如何しならいゝか、ともう萬事萬端氣になりて、こんな淺間しき事ではと歎いてばかりゐて、此淺間しき者を助けると云ふことに氣が附かぬ。いつも此處でつきあたる。如何しても動かぬ。をこへ佛あらはれて曰はれるには、汝の苦しめる處、心の惡しき事よく承知してる、尤の事である、可受想である、佛其を見捨てぬぞよとやるせなき思召を承りて安心が出來るのである。

先日の講話にも申ましたが、或方が三年程も來聽せられる。先頃中御病氣で一年程も茅ヶ崎へ行きて靜養せられ、やがて歸京して私を尋ねられた。其人の言ふには如何も佛の存在がわからぬと申します。まあ、三年間もきいて居ながら今更ら佛の存在がわからぬとは情けない、其人は私の話を、人の事の樣に思つて居られたのであらう。其人病の爲茅ヶ崎へ行きて一年も居られたがどんなに氣樂な事であらう。私は多忙で一日でもゆつくり休む暇なさに、若しそふいふ處で例ひ一日でも暮したら嘸愉快な事であらうと思ふたが、然し心が苦しければ其間も一日も安心出來なかつたであらう、辛い事であらうと思ひまして、其事をお尋ねすると、いかにも其間一日も安心の日はなく苦しみ通しだつたと言はれる。私は一年も苦しみ通しにして居たら、如何んなであらう。と思つて非常に御氣の毒になり、其時其人は丁度阿闍世王の樣な私であると云はれた故、ふと氣がつくと私は佛が阿闍世王に對して、汝罪あらば我亦罪ありと云はれた樣に、其人が兎に角長い間來聽せられて、三年後の今日まで安心できず苦しみて居らるゝは畢竟、私の云ひ樣が惡るかつたのである。聽きに來らるゝに、熱心に道を求めて來らるゝに、二三時間話して解らぬと、まあ今わからねば又此次に本でもよんで居たまへと引のばしておりて迫つてお話せぬ爲てある。まあ時節をまつてと云ふてゐるが、大悲の親から御覽になれば、其解らぬ、迷へる苦しめる有情が可哀想である。此親がまつてゐるぞと一分一時もまたれぬ、やるせなき親心もてのぞんでおられるに、其内に〳〵と、逃げる奴なら兎も角、手を出して求めて居る人に此方より其御慈悲を渡さず、引延して居るは、何と云ふ申譯なき事であらう。此人を三年前に安心させておきしならば、後の一年間の靜養も如何に心地晴れやかに出來たであらうものを、人に物をやると云ふて、物を放さず握つてゐると同然一年間阿闍世王の樣に苦しめておきしは、畢竟私の罪でありしと深く私は懺悔しました。そこで私は其人に云ふに、佛が阿闍世王に言はれた供養をうけた我も罪があるとか、頻婆沙羅王は佛が供養を受けた功德で王になつたとか云ふことは一寸わかりにくいかも知れぬが、わかりやすくいへば、頻婆沙羅王は佛に歸依して、佛成道後直ちに其王を尋ねて話をせられた程であつた。されば佛が其時から、阿闍世王に話してきかせておいたなら、阿闍世は今の樣な苦みはなかつたらうに、今汝が此の苦みを見るは我亦罪ありと仰せ下されたと頂いてもよいのである。其の如く私も、あなたにもつと早く取つめて話したら、其樣に長き苦しみなかつたらうに、あなたを夫程迄に長く苦しめ置いたは、實に私にも大なる罪がある。故に今日はあなたも又同じ苦しみを重ねてくりかへさぬ積りてよくお頂きなさい。我々は斯く此次ぎ〳〵と逃げておれど佛のやるせなき御心は、其逃げる解らぬ淺間しき者を見捨てず、まだか〳〵と待ち兼ねておられるのでありますと、かく話しましたら其人始めて心底より喜んで歸られました。長い間惱ましておきしは我罪である、あらありがたいと氣附かせて貰ひました。これがこの『涅槃經』の難有き御文であります、かく阿闍世王は印度に於て種々の敎ありて問いたがわからなんだ、如何しても安心出來なかつたに、佛の御慈悲に逢ひ奉りて始めて安んずることが出來た。此事を親鸞聖人は全く自分の身上にとりて云はれたが、此悲哉の御文であります。此樣に淺ましき罪深き親鸞を、見捨て給はぬ、彌陀の五劫思惟の願を案ずれば親鸞一人のためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と喜ばれました。今日今時待ち兼ね給ふ親を殺し、佛身より血を出し、佛の敎檀を亂した、罪惡深重の者に對し、佛はおれが惡かりし、其者を救ふと云ふが親の心である。戴けぬと云ふてゐるは、自分の心で此の佛のお心を小さい事の樣に思ひ居るからである。罪深き故助からぬと云ふは、何れほどの御慈悲か解らぬからである。茲が佛法の佛法たる處、眞宗の眞宗たる處であります。

全體眞宗と云ふと一つの宗旨の樣であり、又實際左樣思ふが、成程宗旨には違ひなけれども、聖人の『化身土の卷』には此御文があります。「大經の中に說かく、道に九十六種あり、たゞ佛の一道これ正道なり、其餘の九十五種に於ては皆これ外道なり。外道をすてゝ以て如來につかふ云々」とあります。つまり此九十五種の道ではない、此廣大な佛の道である。これ佛法これ即ち眞宗であります。聖道權化の敎は假の敎であります。和讃に

聖道權化の方便に、　　衆生ひさしくとゞまりて、
諸有に流轉の身とぞなる、　　悲願の一乘歸命せよ。

眞實敎とは他でない、佛が眞實である、此佛に歸命するのが眞實の敎である。聖道門自力は佛法には違ひないが、つまり眞實に佛の力に絕對によることの出來ない人を導びく假の方便に、自力の道を設けられたまでゞ、これでは眞實の處へ行くことは出來ず、流轉輪廻する故、たゞ佛の絕對の御慈悲に歸命せよと云ふのであります。

念佛成佛是眞宗、　　萬行諸善是假門、
權實眞假をわかずして、　　自然の淨土をえぞしらぬ。

たゞ念佛成佛のみが眞實の敎であり、他は悉く假門である。念佛成佛とは南無阿彌陀佛〳〵と自力を捨てゝ佛に歸命するのである。淨土の敎のうちでも、行を正しくするのである、念佛多く厲むのであると思ふて居る間は、駄目である。悲哉愚禿鸞との御悲歎は、眞實私の胸の中であつて、愛欲名利の淺ましき私を救ふて下さるは、佛の御慈悲ばかりである。汝のむねのうちには、かくの如き淺ましき心があらうがなと云ふて下さるのである。それをわるい〳〵と思ひながら、氣持わる〳〵お念佛云ひて日暮して、罪惡もこれではいかぬと思ひながらお念佛でぬりまぶして、いゝかげんにしておくのでは、駄目である。到底頭の上らぬ、申してみやうなき淺ましきものと佛かねて仰せ下されてあるのである。『御文』には「末代の

凡夫、罪業の我らたらんもの、罪はいかほどふかくとも、我を一心にたのまん衆生をば、かならず救ふべしと仰せられたり」とチャンともう云ふておいて下さるのである。皆さんが法をきいて、自分は悪しき者と思ふても、皆と同じく人並に悪るいのだと思ふてる間は駄目である。私はかう思ふて居ます。私は實に邪推深い、曲れる根性の者で皆並とは何うしても思へぬ。五障三障の女人と云ふても、皆並と思ふのではない、佛に悪るい、其してみやうなき悪人を、阿彌陀如來が必らず助けんと仰せ下さるので、蘇ることが出來るのである。「汝一心正念にして直ちに來れ、我よく汝を守らん」。汝如何程悪しくとも我は呆れやせんぞ、直ちに來れ、總て水火の二河に墮せんことを恐れざれ、と仰せ下さる。他力の上では自分の力で何一つ出來ると云ふことはない。實に悪しき者如何とも自分でして見やうないが、其者を助けんがために佛が、現はれて下さつたのである。阿彌陀如來法藏比丘の昔平等の大悲に催されて、佛となりて衆生を救はふと、五劫思惟兆載永劫の御修行をして下さつた時、三業の修したまふ處淸淨眞實ならざる處はなかつた。衆生は心口意の三業悪く汚穢不實であるから、其淸淨眞實の佛の藥を用ゐよと『御本書』にもあります。此用ゐよといふお言葉がありがたい。丁度悪しき胸の中に、病氣の時藥を用ふる樣に用ゐよと、儀を果てたる胸の中に用ゐるのである。實に此上もなき悪しき私であります。此御慈悲なくば胸中安心如何して出來ませう。昨夜も思ひ出しましたが、宗旨の上て淨土宗、眞宗のわかれ目は何處かと云ふに、善導大師の仰せを眞實に頂かず、たゝ念佛を稱ふるだけのことにとると罪悪觀が起らぬ。虛假を抱くな、內外おなじくよくせねばならぬ。と云はれて、やつてみるが實際出來ぬ。悪しき心が頻りに起る。「外に賢善精進の相を現して內に虛假を懷くこと勿れ」と云ふ善導の御文はかく讀むのがあたり前のよみ方である。內にきたない心もつて外によい相を現してもいかぬ故、內に虛假の心をもつてはいかぬと言はれたのである。されば淨土宗では、衣をつけ袈裟を着し、お念佛を稱へておるものが、悪しき事をなしては勿體ない、少しても出來ぬながらもよい事をせねばすまぬと思ふ。これは世間普通よりいへばあたりまへなれど、眞の味ではない。親鸞聖人は此文の心をよまれた。されば こそ大層角だちし樣なれど、悪しき者が安心させて頂けるのである。「外に賢善精進の相を現するを得ざれ、內に虛假を懷けは也」。表にえらさうな風をするな、內に虛假不實の心を懷いておるで無いか。かく私の心を斷ち割られてしまふたのであります。次に

貪瞋邪僞奸詐百端にして、悪性やめかたく、事蛇蝎におなじ、三業を起すと雖名づけて雜毒の善とす。又虛假の行となづく。眞實の行と名けざるなり

と御本書の中にあります。御開山聖人の三心釋の御文を、昨年の夏期求道會にも講義いたせしが、實に難有い、善導大師の御文はよみ方が何やら違ふやうて可笑しいが、戴きてみればほんにそうてなければならぬとわかるのである。よい事しようとしても駄目、汝の心中は如此しと心中を打われてみれば、實に毒まじりの善で眞實の行とはいはれぬのである。次に

例ひ心身を苦勵して、日夜十二時に急に求め、急に作して頭燃を拂ふが如くすれども、すべて雜毒の善と名づく。この行を廻してかの佛の淨土に生せんことをもとめんと欲するはこれ必らず不可なり。何を以ての故に。正しくかの阿彌陀佛因中に菩薩の行を行じたまひし時乃至一念一刹那も三業の所修みなこの眞實のうちになしたまひしによりてなり

私は悪く虛假雜毒なるに、如來は悪く眞實にして下された故私共もよくせねばならぬと云ふのてはない。それでは此虛假不實の私が如來樣のまねをするのてある、實に勿體ない及びもつかぬ話てある。よく出來ぬ凡夫が實にかはいさうてある、世間では一月二月まちてもわからぬて自分をうらみ、三度も四度も親切を無にして自分を恨む時は、大抵のものは一月二月と辛抱しても、とう〳〵怒りて其人を捨てるてはないか。然るに佛は御自身の御修業より私の悪しきを救はんがために遊ばされ、其悪いのが見捨てられぬといふのてある。前の樣に如來樣がよくして下さる故、自分もよくせねば、すまぬと云ふのては如來樣は一つの杖、目當となりて、我等を救ふのてはない。私は淺ましきもの、言葉烈しき樣なれど、私の心を如來樣にタチ割られる。懺悔して、底迄懺悔しても今一つ懺悔し足らぬ處が殘る。如來樣はよく底の底までみとほされて、お前はそれでよいとおもふておるが、まだ底があるだらうかと、凡愚底下と申されます。此方からいふと私は此樣に苦しんだ、悪るいと思ふた、と自分の苦しんだを何が出來たかのやうに思ひ、又苦しむと解る、病氣にてもなつたら氣がつくだらう、と、呑氣に思ふて居る我々に、如來樣は、火宅無常、淺ましき振へる地盤をたしかに思ひ、今少し〳〵と一時を賴みに思ふてる其樣を見そなはし、何をうか〳〵して居るか、汝は平氣ておるが、汝の居る處は危いぞ、とやるせなき、一分一瞬も待たれぬ御心もてのぞみ給ふ。苦しんて、病氣になりてと云ふて延ばして居たら、死ぬ時とて同樣にて、まだ〳〵と引延していつ迄たちても戴く時はない。即今即時、私共はかく呑氣に何氣なき事に思ひ居れど、如來樣の此やるせなき御心をきいた時は始めて氣がついて御慈悲がズン〳〵と胸中にゆき渡るのてある。底の底を示して下されるもの故、私は罪業深重のものと落ちることが出來るのてある。これが念佛成佛是眞宗て、實に底の底なる底下のものが、たゝ念佛の一つの綱て成佛することが出來るのてある。まことに肝心なことてある。念佛稱へると嬉しい難有いと云ふだけては駄目てある。私の胸の底迄御覽下され、私の根性を見ぬきてたまはる廣大な大悲の仰せを頂かねばいかぬのてある。先に申した聖人の御述懷の言葉は實に此味てあります。愛欲名利の淺ましき者を、お見捨なき御慈悲てあるとお喜びなされたのてある。人をうらみ爭ひ、八萬四千の煩惱悉く起る私、苦海に沈淪しておるもののために、布施持戒禪定孝養父母、奉事師長等の事ては到底出來ぬとかねてしろしめし、たゝ念佛の一つで助けて下さるのてあります。

昨夜も或處て話をしたに、こふいふ事を申しました。私が信仰に入らぬ前に、他力の敎を如何戴きしかと云ふに、御本願だとか名號を稱ふるといふは、我身のためとせずして、他力の敎

を頂く我は人にも親切にせねばならぬ、佛が如此よくして下さるから我はかくもせねばならぬと思ふた。これは實に大問題である。淨土宗と眞宗のわかれめは此處である。淨土宗は自利眞實、利他眞實と云ふて、如來の眞實を信ずる我は人にも眞實にせねばならぬ。といふのである。私も必らず眞實心中に爲すべしと長い間、一生懸命にやつて居た。眞實に一分も曲ることなき樣と、長い間やつて〳〵やりぬいた末、かくまて、自分は一生懸命やつてゐるに、人はまじめにやらぬ、私が親切にするに人はそれほどにも思はぬ。自分の親切が屆かぬ。出來ずともわれは念佛して他を信ずる身、惡るく思ふてはならぬと力むが、ます〳〵虛假不實な心が起りて來て、もうしてみやうなくなる。そこで始めて長い間自分は佛のまねをしておつた、自分は如來樣に御苦勞かけつゝある苦惱の衆生であるを忘れて、何かえらい事が出來るやうに思つて居たは大違ひであつたと解らして戴き、如來樣の御廻向と云ふことに氣がつきました。若し如來樣が御廻向して下さる事なくば、かくの如く虛假不實のものは如何して安心が出來ませう。

眞實信心の稱名は、　　彌陀廻向の法なれば、
不廻向と名づけてぞ、　　自力の稱念きらはるゝ。

そこでまた此の如來廻向を貰ふ貰はぬが問題となる。成程自分は惡しき不實の者とはしれど、如何したら御慈悲が頂けやう、又頂いたと思ふても、もつとよく頂きたい、等と貰ふ貰はんて苦しむ。これは肝心な事である。安心すべきことて却りて信心安心が苦になる。先日も七里師の言行錄を作るからとて或本屋の方がきゝに來られ、何か七里師の事につきて面白い際だつた事はないかと申された。私は七里師にはお目にかかりし事なき故解らぬけれども、少し聞いて居る故申した。七里師につきては私は一向ありがたい珍らしい事も無い。きく話も〳〵おなじ事ばかりかいてある。要するに御慈悲を喜べと云ふことのみ繰反しての仰せで何うも信の一念と云ふ點が少ない。極手輕て、御報謝せよといふ事やら、心を入れて聽聞せよと云ふだけの樣である。私はそれとさかさまて信の一念の處だけを申す。後恩報謝も此の信仰に入りての後の事と、少しもすゝめぬ。もし信仰にさへ入れば御相續は必らず出來ると、丸て七里師とは逆である。ソコデ私は思ふには、私は一念をいふにはいふが、私の言ふ一念は何もむつかしい事てない、頂く頂かんと骨折ることてはない。七里師がこの信の一念を申されぬと云ふは、つまりあまり人が一念の處に骨をる故、何も他はない、唯南無阿彌陀佛ばかりと、七里師はごく平易に申されたのてある。即ち同師が云はずに居られるが、つまり私の言ふのと結局は同じなのてある。安心したい、信を得たいと云ふが、如來樣が不思議てある、如來樣が眞實にして下さる、親樣の御苦勞御慈悲は、私の爲めと、かく聞かして貰ふ他に何を頂くのか。一劫二劫遂に十劫と親は待ち兼ねたまふ、三業の所修淸淨眞實なるは私に悉く廻施してやらんためてある。我々は、だからよくせねばならぬと云ふ事てはない、私は其事を思ふたら、眞劍にやらねはならぬと云ふのてはない、大悲の親樣が、私のために此のやうに御苦勞して居て下さると申すのてある。我々は自分がまことにする念

佛稱へるからは、人にもよくして柔和忍辱にせねばならぬと、何時の間にか如來樣のお慈悲を忘れて、自分のする事に骨折る。私は近頃殊に思ふ。今日集まる人の中に說敎きく人が多い、其人等はかふ思ふてる人が多い。自分の心は苦しい、境遇も苦しい、然しこれは前世の約束、因緣ぢや、此世のありさまぢやとあきらめ、そして如來樣のお慈悲を頂くのぢやと思ふてゐる。境遇ぢや、因緣ぢや、と云ふは駄目てある。成程さうにはちがひなけれども、人が私の心を知らぬが、まづ我慢せよ、人は自分に無理いふが、まあ此世の事は思ひ切つて行く、それ故御慈悲いただくのてあると、自分は運命因緣て押へて置いて、御慈悲をぬりつけて置くのてはいかぬ。惡るいと人を眺める自分も惡るい、よくしてゐると思ふのも惡るい、我々惡るいと一應おもひ、どれだけ惡るいといふものゝ眞實頭が下らぬ。しかし、其汝の境遇は苦しからう無理ないと、其者の身方となり、見捨てぬ心から長々の間御苦勞して下さる。大底に惡るいと云ふのてはない、もう底の底まて我々一分の誠と言ふものは無い。其者を見捨てぬ如來の御まことが居て下さる。其如來の御まことは私の惡るいが目當ててある。如來の本願の起りしは其處てある。御本願の起つた時、「設ひ我佛を得んに十方の衆生」と、既に此の時にうまれたが最後てある。此方より戴くのてないならそれては向ふから頂かんならんと居直つては又駄目である。

そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ

と聖人も仰せられた。御本願をたて、名號の不思議にて我等を助けんと思しめし立ち下されたのてある。又『信卷』の中には、

衆生佛願の生起本末をきいて疑心あることなし、これをきくと云ふ。

實に其御本願の源を承りて、疑なくはいと信ずるばかりてある。昔聖人が法然聖人の處へ行かれて苦しまれたあげく、法然聖人が敎の理致を極めて懇々と說かれしに、たちどころに安心せられた。敎の理致を極めての御話とは、布施持戒等の行て助けるのてはない、念佛の一行て救ふと云ふ御親切を說かれたのてある。此の仰せを承はりて疑ひなくはいと信ずる一念、此時がはや娑婆の終り、臨終てある。

本願を信受するは前念命終なり。即得往生は後念即生也。たゞ信ずるばかりて往生は定まるのてある。浮々と聞いては駄目てある。段々と聞きてみればそれ程の深き事か今迄それとはしらずと一言葉て頭下りて、聞かして貰ふのてある。「疑心あることなし」とは、もう疑ふと思ふても疑へぬ、もう逃げることは出來ません。親の御心をきくなり、これはしたりと驚きて家に飛んてかへると同樣てある。佛の我々を待ち兼ねての六度萬行の御苦勞は、あなたの御心のやるせなき御心のあまりなされたのてある。私の欲深き心の爲めに、それに廻施せんがため布施の行を修したまひ、南無阿彌陀佛の六字となり下され、あゝ可哀想ぢやとあなたの御心が、積り積りて我々の貪欲瞋恚の心に下され、私の愚痴の心を如來の見捨てたまはず、淸淨歡喜智慧光、愚痴には智慧の光を以てし、瞋恚には歡喜の光を以てし、貪欲には淸淨の光を以てし、三毒の

心にむかひて悉くそれ〳〵の光を以て照したまふ敵、「若三途勤苦の處にありて、此光明を見奉れば、皆な悉く休息する事を得てまた苦惱なけん、命畢りての後解脱を蒙る」てあります。『和讃』に

無碍光佛のひかりには、　清淨、歡喜、智慧光、
その德不可思議にして、　十方諸有を利益せり。

私の爲にかくも御苦勞して下されし御親切が、私の淺ましき煩惱滿ちあふれたる胸の中に亦みち〳〵て下さるのである。かゝる愚痴の者、愛欲に沈沒し居る親鸞一人の爲に、佛は態々佛となりてくだされたのである。聖人がそくばくの業をもちける身にてありけるをと仰せられし如く、一重とりても底に底をつくり、恰もラツキヨウの皮を剝く樣に、中まで、みな不實で堅めてゐる、煩惱愚痴の塊の私である。

彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて、住生をとぐるなりと信じて念佛申さんと思ひたつ心の起るとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

かゝる煩惱の塊の者が、誓願の御不思議の廣大な御力で助けられるのである。「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」彌陀の誓願を信じて、始めて十劫來御まちかねの攝取不捨の廣大な思し召しを聞かせて貰へば、ようも〳〵おまち下されしとたゞ恐入るばかりであります。

十方微塵世界の、　念佛の衆生をみそなはし、
攝取してすてざれば、　阿彌陀と名づけ奉る。

長い間知らせやう〳〵と佛はお思召下されし故、我々が茲に氣づかして戴くと、佛は實に御滿足に思召下される、經にも衆生佛を憶念すれば、佛亦是をきく、衆生佛を禮拜すれば佛亦是を見給ふ。

其の氣の附く一念に、佛は大滿足して、八萬四千の光明を放ちて其の者を攝取して捨て給はぬ。念佛の衆生と言へばむつかしく思はれるが、必ずしも念佛を稱へる者を言ふのではない。阿闍世王が御信心喜んだ時佛がいはれるには、お前ばかりが喜ぶのではない、一切衆生後の阿闍世王の喜ぶ處てあると、佛は大に御本懷に思召て阿闍世王を讃め給ふた。其時摩訶陀國の人民皆三耨三菩提を得させて貰ひたとある。其時阿闍世王が讃嘆なされた御文に「佛は一切の爲に常に慈父母となり給へり。正に知るべし、諸の衆生は皆な是如來の子也。世尊大慈悲衆の爲に苦行を修し給ふこと、人の鬼魅に着せられて狂亂所爲多きが如し」と、大悲の廣大な親樣が恰かも狂氣の樣に私共を思し召し下さる長々の御苦勞は、今日迄私を助け樣が爲であつたのである。

彌陀釋迦方便して、　阿難目連富樓那韋提、
達多闍王頻婆沙羅、　耆婆月光、行雨等。
大聖おの〳〵もろともに、　凡愚底下のつみひとを、
逆惡もらさぬ誓願に、　方便引入せしめけり。

此の親心を知らせて貰ふまでの親樣の御親切、釋迦如來の御心勞、廣大なやるせなき御心、之をもて方便引入して下されたのである。されば思はぬ處に段々と御法が廣まり、宗敎の內部、世間の事柄一人〳〵の身上、何から何に到るまて親の御苦勞をしらせるための御方便なのてある。かくして長々の御苦勞ありがたう御座いますと、始めて親の御苦勞を感謝する時、

金剛堅固の信心の、　定まる時をまちえてぞ、
彌陀の心光照護して、　ながく生死をへだてける。

其の一念を親はまちえたぞ、あゝ長々まちかねだと攝取して下さるのであります。《三月十七日》

告白

諸の衆生は如來の子也

川村貞治

一

我が母は余が三歳の春正月十四日。月明らかなる夜遠く此の世を去れりと聞く。されば父と伯母との充分なる慈愛に浴しつゝも、中學に入りしよりこのかた常に他鄕流浪の客となれば、故鄕戀しく母慕はしの念は止まず、學窓に校庭に月見るたびになき母の思ひ出でてひとり泣くこともありき。まことに旅の身には生ける父も亡き母も共に同じ、逢ふことの叶はねば余は孤兒なるよと思はれて。されど中學時代には春夏冬の三度び休暇ある毎に父の膝下に馳せ歸りて、心ゆくばかりの慈愛に浴することも出來、我が學びの道も安らかにいと樂しかりき。

余は元來身體壯健にして一度も病めることなく、性粗野にして禮儀を解せず、友に交りては非常に快活に見えしならんも、時に沈鬱に陷ることも少なしとせず。幼なきとき我が家に近き墓地にて遊ぶを常とせしも、恐怖の念起らず、母の居る所と思へば却て慕はしく暗夜にひとり訪ふこともありき。父は神佛を尊崇すること厚く、毎朝佛前にて觀音經を誦するとき、見世に買ふ人來ればすなはち立ちて之を賣り、また誦してはまた賣るを見て、子供心にもありがたき事と思へり。また我が五六歳の頃、なき母の追福のために余を檀那寺の小僧にせんとて連れ行きしも、餘りに泣きければ連れ歸りしと聞く。

二

余が中學五年の末鄕里にて父は急に腦溢血症に襲はれ、引いて精神にも發作的に異狀を來すことあるに至れり。やがて余は中學を卒へ、學に志して東都に入りしとき、父も療養のため出京して兄の許にありき。數ヶ月を經て高等學校入學試驗も濟みて後、歸鄕と稱し父を欺きて、兄の經營せる某礦山に連れ行けり、誠に我等は父を人里遠き山間に監禁したると同じき也。岩代越後の國境に近き飯豐山の南阿賀川の畔、如何に余は不孝なるを泣きしよ。或る日父は道に迷ひて一夜歸らざりしかば余等は萩、尾花亂るゝ初秋の山路深く父を高らからに呼びつゝ尋ね入りしに、木魂に響く我聲の遠く聞ゆる度に、余は不孝の罪に責められて身を切り裂かるゝ如くなりき。父は荊刺に傷き蚊虻に刺され、辛うじて樵夫に助けられて歸りしも、數日を經て、兄が不在のとき、最激烈なる痙攣を起してさきの腦溢血症を再發せり。顏色は紅潮を呈し、眼光異樣に輝やき、口角泡沫を放ち、全く人事不省に陷りたれども只「國に歸らん」と連呼し給ふを聞く。其の聲現に耳底に存し悲痛胸に逼まりて涙止め敢へず。村醫を二里ばかりの處より聘し來りしに到底望みなしと云ひしも二十日程經て少しく快よくなりし故、兎に角鄕里靑森縣に歸ることゝし、十數里の路を戸板に載せて擔ひ、百里を汽車にて歸國したり。然るに父の病

は思の外よくなりて歩行も少しくなし得るを見て、鄉家のものは驚きて「斯ほどまで達者なる身を連れ歸りて商賣の邪魔をさすとは」などゝ語りしと云ふ。此の毒言を聞いて悲憤の念抑へがたかりき。

かゝる間に余は幸に入學試驗合格の通知に接したりしも、父は病みて力なく、家庭は色々の行き違ひより余に學資を送らずと云ふ。學校始業後一ヶ月ばかりの後、余は事情を鄉里の篤志家に訴へて學資の幾部を借るゝことゝなし、飽くまで奮鬪して志を成さんとす。別るゝに及び父は余に語りて曰はく「多くの子はあれど汝は最愛の兒也、今別るゝ事の惜しけれども學校は大切なり。行け、父の病氣全快も近かるべし」と。嗚呼誰れか父を狂せりと云ふ。余は只父が病氣前と全く變らずして常に慈愛の凡てを傾け給ふを感ずるのみ。

かくて余は第一高等學校に入り、暫らく勉强したるに翌年の紀念祭前日急電に接して歸鄉すれば父既にあらず。余が心混亂して殆ど父の病死を疑ふが如く、雪の夜道を走つて墓地に慟哭し、第一に叫びたるは「よくも殺されはせざりし」との一言なりき。余は父が臨終の室に閉ぢ籠もり、家人を恨みて四日ばかりは續けざまに只泣けり。此時余を養育せる伯母及び乳母等の愛に滿てる慰藉なかりせば、人の怪ぶめる如く余は發狂せしやも計るべからざりしならん。

三

父の死後家庭内の行き違ひも多少融和し來り、余に學資を送ることも定まりて再び學窓の人となりぬ。而して德風會に入りて近角先生の歎異鈔講話を拜聽するを得たるも此の時よりなり。絶對他力無碍の一道の御敎を承はりて、世には有り難き法もあるものかなと驚きぬ。余は固より哲學を知らず、倫理を解せず、只現在の此の身の惡しきに苦しみぬ。兄に對しては隔て心あり、學問に對しては不勉强なり。盜心潛み、劣情熾んにして、人を僞はり自ら欺き、而かも人に譽められん事と、見榮よからん事をのみ力む。

先生の講話は難有けれどもそは先生のことにて自分の出來ることならずと思ひぬ。信心無碍の妙樂をのみ羨み、美はしき常樂我淨にのみあこがれて眞實求道の志なし。余は美はしき服を着んにはわが心も淸からざるべからずとなして、先づ我が心を修養し、我が行を愼しまんとせり。然しながら一事として善きことの成れることなし。終には極端なる英雄崇拜を事とする一高寄宿寮に生活せる故、强ひて剛健の風を裝ひ、煩悶などは弱蟲のすること也などとなし、信仰に入らずとも生活には差支なしなどとも考へて、只騷々しき遊びにのみ耽り一時を糊塗せんとせり。然しながら父の死を懷ふごとに悲しみ止まず、夜更けて夢闌かならざるときは、余は依然として罪障深き一肉塊なるを哀しむ。父の死後第一の春休みには、三浦半島の某寺に籠りて、父の常に誦せる觀音經を書寫せるともありき。其の年の夏休みには、父なき鄉里に早く歸るを厭ひて東都より三百里の道を步み行きたり。日光山の奥に入りては白雲重疊たる處自然の精氣を貪り、鳥海山の頂きに宿しては山影朝日を受けて日本海に映ずるの壯觀を擅まゝにし、雄壯半島の奇勝、十和田湖の幽趣、到る處に只君が代と寮歌とを

うたひて、自ら誇りて我こそは一高健兒なるよとなす。然しながら僅か十圓餘りにて三十日の行程を凌ぎたることなれば、困苦欠乏も甚しく、風雨に衣は裂け、巖角に足を傷き、顏色憔悴してさながら乞食の如くなりて家に歸れば思ひきや、十年以來會はざりしわが姉の歸國しありて我を待ち居らんとは、相擁して泣く。歸省を厭ひし三百里の旅行は只此の涙を得たるのみ。

四

高等學校の生活は有邪無邪の間に過ごせり。求道學舍の講話を聞くも只一時の氣休めとするのみ。工科大學に入りてまた同じ。三年の夏實習のため五ヶ月ばかり神戸に至り、濁惡なる職工及びエンジニアーの生活に觸れて、余もまた斯くの如き社會に入らん事の恐ろしく、自らの行も次第に墮落しつゝあるを感ず。姉のことにつき兄と爭ひたることもありて、余は切實に惡業の我が身に逼まり來りたるを覺えて「此の身今生に向つて度せずんば、更らに何れの生に向つてか此の身を度せん」と悲しめり。

なつかしき東京に歸り、遭ひ難き近角先生の法莚に連なり、多生曠劫聞き難き佛法を聽く。何れの言葉の殊に有り難しとは覺えざれども先生の一語一語胸に響きて涙止め敢へず。三世諸佛の出世の正しき本懷は、只阿彌陀佛の智願海を說かんが爲めにして、五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、偏に親鸞一人がためなりけり。是を以て如來は阿闍世王の爲めに涅槃に入らず、而して阿闍世とは即はち煩惱等を具足する我れ自身なり。斯くまでの御心配をかけながら余は常に御慈悲より逃げ去らんと力めたる也。更らに先生ののたまはく

如來一切の爲めに常に慈父母と作りたまへり。當に知るべし諸の衆生は皆是れ如來の子なり。世尊大慈悲にして衆の爲めに苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて狂亂して所爲多きが如し

と。實に余の父の狂へるは余を愛せるがためなりき、而かも余は父を欺ける不孝者也。此の語は特に余のために仰せられたる如來の直語と信ず。然るに余は惡しきをも惡しと知らず、我れひとり孝行顏をなして是迄兄を恨み惡みたることの恐ろしさよ。我を導きて中學に入れ、大學を卒らしめ、こゝに先生の法莚に連なるを得しめたるもの凡て皆兄の愛にあらずや「敬て一切往生の知識等に白さく、大いに須らく慚愧すべし。釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり、種々の方便をもて我等が無上の信心を發起せしめたまふ」嗚呼余は實に惡しかりし也。一筋繩にては行かぬ曲者なり。此の惡しき身なるを佛かねて知ろし召して、汝一心正念にして直ちに來れ、我れ能く汝を護らんとのたまふ。然り、余は只如來の御膝下に馳せ參ずべきのみ。「初果の聖者尙睡眠し懶惰なれども、二十九有に至らず、何に況んや十方の群生海斯の行信に歸命するものは攝取して捨てたまはず。」我等は大磐石の安きに居るなり。いざいなん、魔鄉には停まるべからず、曠劫よりこのかた流轉して六道盡く皆逕たり。到る處に餘の樂しみなし、唯愁嘆の聲を聞く、此の生平を畢へて後に彼の涅槃の城に入らん。」

五

先生の御講話によりて身にひしと有り難き大悲の浸み入りたるときは、御念佛もひとりでに湧き出で、その日は道行くときも只喜ばしき感謝の念に堪へず、我が心も大空の如く澄み渡りぬ。間もなく郷里に歸省せしに、凡ての人は我を歡び迎ふ事の是迄とは全く變りしに驚きぬ。

速やかに功德の大寶海あらはれて、實に鮮やかなる日暮しを送るを得るなり。昨年妻をめとりしに彼もまた近角先生の御手引にて心安らかとなり誠に感謝に堪へず、今は大坂の造船所にありて心地よく働きつゝあり。靜かに省みれば、我等の業報いかばかり强きにや、邪性常に止め難く、煩悶に眼障へられて、攝取の光明見ざれども、大悲ものうきことなくて、常に我身を照らす也。南無阿彌陀佛。

最後に余の告白は餘りに家庭内の私事にわたりて申譯なきことを謝す。

私の苦む有樣が可哀いとの彌陀の仰

前本義和

一

私は滋賀縣出身で御座いまして、近角先生とは同國同郡で、然も僅か二里計りしか距つてないのに、東京へ來るまで御名前も存じませんでした。然るに此度は不思議の御緣で、先生の御導きによりて大悲の親樣を知らせて頂きまして、まことにこれに餘る嬉しさはありません。

偖て私の東京へ參りました原因は、或る一つの事情より一家の秩序も大に紊れ、忍ぶべからざる苦痛から「なんでも金を儲けたい、人間は金ならでは自分の身を守り心を滿足さす事は出來ぬ」との一途の考で御座いました。それで上京後も一意專心此目的に向つて盲進したのです。

上京後滿六ヶ年計りは私の親戚の者の仕事を手傳つて居ましたが、熱心に事に當りますので、仕事の呼吸をも充分飲込み得たのみならず、私共の仲間の者からさへ「君は實に先天的に此商賣が適してゐる」等と賞めはやされ、自分も機敏と熱心とには充分自信を持つて居ました。

其後明治四十三年春から全く獨立して働きかけましたが、愈獨立して見れば、損得共に全く自分に直接の關係を生じて來るのですから、熱心は今迄よりも更に一層の度を加へまして、事業は着々成功し、豫期しました金も、ぼつ〳〵出來ましたのです。勿論この時分には金を得る爲めには何れの手段をも厭ひませんので、「虎穴に入らざれば虎の子は得られぬ」と頗る冒險的な事にも手を出して、然も夫々成功してゐたのです。

其年の七月に他に一層儲けの多い商賣を勸められて、前の商賣と幷行して進んでをりましたが、九月末になりまして七月投資に對する收入について始めて計算をして見ましたら、どうも當初考へた程儲からぬのみならず、損が行く樣子でしたから早速中止する事として、再び前の商賣に專心する樣になり、この新しき方は整理計りしてゐました。かくして年末になつて帳簿をながめて見ますと、新しき商賣の缺損は補塡されたのみならず、純益も相當加はつては居ましたが、こゝて心の中には「今年の後半期程につまらぬ事をした時はなかつた」との考に充ちて、不快なる明治四十四年を迎へたのであります。

二

新年になりましてから去年の失敗の跡を考へて、「今後は小々儲けは少なくとも可成確實なる方法をとりたい」と心懸け、云はゞ思想がいくらか冒險を脱し、堅實になつて來たので御座います。所が何となく心が平穩でありませんので、今迄寺詣りもした事のない私が、說敎でも聞いて見たいとの考が起つて來ました。處が以前から私方へ矢張同郷の井口乘海と云ふ人が出入をしてゐました。此人は元來僧侶ではあり、殊に近角先生の同村の出身ですから、同郷の人として親しく交際もし、又出來得る丈世話もしてゐましたので、此人に「誰かよい說敎者はないか」と尋ねましたら、井口君は近角先生の事を語つて、九段の第二求道會へ參る樣にすゝめてくれました。そこで其月の中に九段へ聽問に行きましたが、「成程えらい坊さんだ、どうも難有い事を云はれる、話は皆私の胸にひし〳〵とこたへてそうだ〳〵とうなづかれる」と感心して飯つて來ました。其後續いて參りたいとは思つて居ましたが、月が變れば又候利慾の爲めに熱中して遠ざかつてゐました。

所が三月になりまして、一別以來曾て一度も病氣した事のない壯健な故郷の父が、大病だと知らせて來ました。何分期日を切つた仕事計りしてゐますので、早速飯國も出來ず、夫れ〳〵準備をして居る內に、電報が參りましたので「天壽とは云ひながら、どうかして飯る迄正可の事がなければよい」と心急ぎて飯國しました。思ひ廻せば其以前に、「父は老年で何時死なれるかも知れぬ、一度近角先生の話を父に聞かせたい」と考へ、井口君に賴んで、先生の御都合を伺ひましたが、先生は丁度金澤へ御出になる折でしたけれども、時間の都合で立寄る事は出來ないとの御事で、殘念ながら私の希望は充たす事が出來ませんでした。今から考へると、自分の一大事は棚へ上げて仕舞つて、父の事ばかり危い樣に思つてゐました事を恥かしう存じます。

かくて電報により飯國しまして、挨拶もそこ〳〵父の病床に到りますと、父は俄かに苦しき床に起き直り、「あゝ能く飯つてくれた、お前に逢ひたかつた、茲二三日は車の音がして

さへお前かと待ち兼ねた、成功もしてくれたし、己はこれで満足だ、實は今日までお前の方を向ひて、手を合はさぬ朝は唯の一日もなかつた」と、私の手を握り涙を流して喜ばれました。私は此時「親はこれ程自分の將來を案じ煩らひ待つて居てくれるのか」と、つく〳〵親の難有味を氣附かせて貰ひましたが、これが軈て此度喜ばせて頂く基となつたのを深く感謝します。

其中父の病氣も平癒し、上京後も亦續いて勵んで居ましたので、昨年末には四十三年末に比し心配もなく、又決算も正月に期した如く堅實にやつたので、成績も良好て御座いましたから、今年の新春は愉快に迎ふる事が出來ました。

三

今年になつてからは體も少しく閑を得ましたので、何となく心の安慰を得度、去年參つて難有かつた事を思ひ出て、又九段の求道講話に參詣しましたのが、一月二十日の土曜て御座いました。此時先生は「世の中は何處迄も五分五分で引張り合ひ計りをして、死ぬる迄暮してゐるのだ」との御話をして下さつたので、「あゝ成程そうであつた、今日迄金さへ貯へれば何事にも頓着はせぬと考へて、死ぬる事は遠い所に置いて少しも思はなかつたが、如何にも自分は五分五分の綱は力任せ引締めて見たものゝ、尚心は少しも平和てもなく滿足もえられぬ、そうして見ればいつ迄經てもこの儘では駄目だ、金なんかてはとても人間は滿足はえられぬのだ」と心底から感じさせて頂いて皈りました。

其後絶えず此不穩なる思ひを去りたい、又安心がしたいとの希望ばかりて、念佛を申し先生の著書をも讀んでゐましたが、苦しみは日一日と增して來る計りてありました。或時は火炎の中に包まれて死なんとしたる夢に襲はれて、寢汗を全身に浴びたる事もあり、色々煩悶してゐましたが、つい近頃私の知人が一人未だ若年なるにも拘はらず肺結核て死亡したのです。此知人が臨終に際し、過去の業報を顧みて良心の苛責に堪えず、轉輾反側して悲慘なる最後を遂げたと聞いては更に一層求める心は強く、顏貌は痩せ夜も眠らず苦しみますので、私の妻は見るに見兼ねて「人は說敎を聞いて喜ばれるに、あなたは其樣に苦しむなら止めたらどうです」と云ひましたが、偖てこう云はれたとて止める譯には行かず、益々此煩悶の解決を遂げ安心がしたいのてありました。

其中に井口君も何か人生上の事について煩悶しかけたと見え、一心に求めてる樣子てしたので、二人がいつも第一及ひ第二求道會へ參りましたが、其歸り道等て私は泣いて此苦痛を打明けますと、井口君は「もう一寸の處が分らぬのだから先生に直接御尋ねなさい」と勸めてくれました。そこて二月二十七日朝先生の御宅へ伺ひまして、我が禁じ得ざる心底の闇黑點を訴へ、先生から色々御聞かせに預りましたが、矢張安心が出來ません。先生は尙「信仰の餘瀝」を讀めと仰せられましたので、再三拜讀しましたが、

「信界に於ける監獄」の章中に

既に吾人の心が吾人の慾心の爲めに繫縛せられて居ると覺つて見れば、是非とも吾人は此繫縛を解脫せねばならぬ、そこて吾人の心中て善き心と惡しき心と戰爭が起る云々

の文を見て、如何にも左樣てある、早く解脫したい〳〵と求め〳〵て苦しんても到底も喜べない、三月三日四日の晩は此問題の爲めに一睡もせずに考へましたが、五日未明四時頃に御文（二帖目第十通）の中に

そも〳〵當流の他力信心のおもむきと申すは、あながちに我身の罪の深きに心をかけず、唯阿彌陀如來を一心に頼みたてまつりて、云々。

の所を見て、嗚呼私は今迄自分の罪の深き事を考へ、此深き罪を如何にしようと右に左に苦しんてゐたのに、「我身の罪の深きに心をかけず」との仰、成程我身の罪深き事を考へてはいつ迄經ても片付くまい「もう佛を頼むより外はない」と心にきめて夜の明けるのを待ちました。

五日の朝又井口君が來てくれましたので、此事を語りますと、不相變「先生に聞かせて頂きなさい」と勸めてくれました。七日の夜井口君の弟さんが來て、「兄さんが明日は是非先生の所へ行きなさい、あなたは遠慮してゐるが先生は大層心配して待つてゐられる」との傳言てした。

八日朝先生を訪づれまして、早速「佛にすがるより外はない」と考へましたと申上げましたら先生は、

「夫はすがる思ひにまてなつたのだが、此處迄は誰ても行つて居るのてある、然し夫ては彌陀につきまかした丈てあるから、そこて御慈悲を喜んて安心させて貰ふのたが、これては安心も出來まい。

そこでこれから私は佛に代つて御慈悲を傳へよう「佛はあなたが此苦みを私に訴ふる有樣を御覽なされて、如何にも其苦しむ樣子が可愛さうてあると仰せらるゝのだ、その仰を難有うと御受けするのみてはないか」

と御述べ下さつた時に、私は「あゝそうてあつたが、これほど迄に罪深き私をかく迄も愛してゐて下さつての御苦勞であつたか」と初めて氣付かせて頂いた時、喜びは胸に充ちて涙は禁じ得なかつたのてあります。御念佛は口をついて出て、嬉しくて〳〵先生に御禮もそこ〳〵お別れしました。

歸途大學前て去年父が病氣の時私の歸りを待ち、且歸つたのを見て喜んてくれた此世の親心を思ひ出して、一層深く御慈悲を喜び、途中ても涙と共に稱名を唱へて歸宅しました。

四

其後の日暮も少しも前と變つた事もありませんが、唯心はほの〳〵（やすく）として易々と御念佛させて貰つてゐます。私の今度氣付かせて頂いた親樣は、誰がなんと云ふても、盜賊が來ても水火の難に逢つても、もう決して失くならない親樣、又私が今後如何なる事が到來し、例令地獄に落ちても見捨てゝ下さらぬ御佛だと思ふと、實に云ふに云はれぬ喜びて御座います。尙其後先生の御講話を聽聞してゐますが、先生の一言一句が皆佛樣の勅命の樣な氣がしまして、信ぜずには居られません。これからは溫かき御慈悲のふところの中て、日暮をさせて頂きますので、私の如き果報者は又とありますまい。

南無阿彌陀佛。

雜錄

眞僞勘決

近角常觀

眞僞勘決とは甚だ六ヶ敷い文字でありまして、如何なる意味かと申し升すると、『敎行信證』の化身土の卷の下卷に、其の事がありますて、其意味を解り易く申述べますについて、先づ文字の意味をはなし、次に信仰上の意味を詳敷御話致さうと存じ升。

親鸞聖人が淨土眞宗を御開きになりまして、淨土眞宗の眞と云ふ文字に、深い意味が籠つてある。一體眞宗といへば、一つの宗派の名の樣に考へられますが、勿論すでに淨土眞宗と云ふ宗旨が成立て居るからには、是が宗名には違ひない、併し彼の宗旨、此の宗旨といふて、宗旨の區別をする意味ではない。親鸞聖人が淨土眞宗と申されし意味は、かねゞ〳〵申します通り、念佛成佛是眞宗といふ文字から來て居ます。其は心から佛の御慈悲を頂き、其の御慈悲に救はれて、南無阿彌陀佛〳〵と喜ばしてもらつて、極樂に往生さしてもらふといふが、眞の眞宗であります。今日の言葉に引直していへば、念佛成佛が眞の宗敎であると云ふ意味である。宗旨と云へば惡い意味となる故に眞の宗敎と云ふ方がよろしい。宗旨宗派より云ふのではない、眞のおしへ眞のむねである。

親鸞聖人が眞の字を特に用ゐられたるは、斯う云ふ深い意味があるのである。『御本書』の『信の卷』に眞の佛弟子といふ下に詳しく說いてある。

「眞の言は僞に對し假に對するなり」

假は僞ではないけれど、眞實に達しないものであるが、僞は全くの嘘であるる、僞といひ假といふは何を名くるかといふと次にある。

「假とは即是れ聖道の諸機定散の機なり」

先づ假の敎があるといふ御考である。假は僞ではないが、念佛成佛是眞宗に對し萬行諸善是假門とある所の所謂自力を以て行うとするものである。同じ淨土門でも定散の機は、眞實佛の御慈悲を有り難いといたゞいたのではなうて、假設口に南無阿彌陀佛を唱へても、或は冥想的に之を心に思ひ浮べて喜んだり、或は實行的に心をよくして行うとする念佛ならば、是は眞實の信仰ではないのであります。

聖道權假の方便に、　衆生ひさしく止りて、
諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ。
念佛成佛是眞宗、　萬行諸善是假門、
權實眞假をわかずして、　自然の淨土をえぞしらぬ。

聖道門の敎も、佛が自ら悟られた上にとかれた敎であるから、僞ではないが、吾々が其の敎の通り、自力で佛にならうとするは六ヶ敷しい。佛の眞意は即ち聖道門を說くは假であつて、此の眞實の佛のまことの南無阿彌陀佛の惠一つを說いて、其の大悲に救はるゝが眞なのである。

處で今日は眞假の區別は度々話して居る、前に眞假辨立といふ題でも話したことがあるから、眞假の方は暫く措いて、眞僞の區別、即ち眞の言葉に對する僞の意味を述べることに致します。

實に親鸞聖人は眞假の區別といふことを八釜敷く仰せらるゝと共に、眞僞の區別を明に示されて居るのであります。

「眞の言葉は僞に對するなり」といはるゝ、其の僞とは何を言はるゝのかといふと、『敎行信證』の化身土の卷に、僞のものが皆んなあげられてあるのである。

其れもろ〳〵の修多羅によりて、眞僞を勘決して外敎邪僞の異執を敎誡せば　涅槃經に言く、佛に歸依する者は、終に更に、其餘の諸天神に歸依せざれ云々、

次の文句を見るとあらゆる經文をひいて、印度の神々とか、梵天大釋とかいふ、是が邪僞である。眞の惠をいたゞくのが眞の信仰であると、水際分けたやうにいふて居る。何故に親鸞聖人が、如此、水際立てた言ひ方をせられたかといふと、近頃信仰上の問題が頗る進歩した處が、眞實の信仰を得ずして、徹底せないが爲に同じ文字同じ敎でも、眞假の區別の外、眞僞の區別があつて、佛法と外の敎とを全く區分せねばならぬといふことである。だから此迄說いて居つた眞假の區別といふことから更に進んで眞僞を明に區別して、佛法僧の三寶に歸依することのみが、眞の佛法であつて、眞の惠をいたゞいた上は、他のものに目がついたりして、之を認むる餘地はないのである。甚だ偏狹なる如くであるが、眞の信仰は如此水際立つたもので、親鸞聖人のいはるゝ處の眞意は實に茲にある思てあると云ふことを、時事の問題の上で解り易く言はふと思ふ。

此は勿論信心を頂く上の事で、決して餘所の問題ではない。遡つて言へば聖德太子が佛法を興隆された時、政治文學美術皆佛法の精神から日本の文明が現はれて來たのであるが、其根本は太子が十七憲法において、第一條に人生の根本義を述べ第二條に

二つには曰く、篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧なり。云云

と大膽に、篤く三寶に敬へと、明かに餘地なく述べられたは、太子が特に眞宗とは言はざれども、佛法僧の三寶に歸するを以て、眞實の敎と述べられたのである。

即ち聖德太子は、佛法の眞實なる三寶を基として、是に歸すると歸せざるとで、眞僞が別れると、明に言ふて居られるのである。

後世五ヶの憲法といふものが作られた。是は後世色々の考が出たから、聖德太子の考の上に自分の位地を見出ださうとして作つたものである、其の五ヶの憲法とは、第一　通蒙憲法、第二　政家憲法、第三　儒士憲法、第四　神職憲法　第五　釋氏憲法　是れは全く僞作であつて、佛法一つで出來て居る十七憲法を、曲げて、神道儒敎等に當て嵌めたものである。眞の十七憲法を通蒙憲法と名け、其中に第二條を改作して第十七條とし、三法とは儒佛神なりとしたのである。是れ三寶歸依の唯佛一道を改作したのである。是て後世如何にいろんな思想が現はれて來たかといふことが解る。

今此事を言ふ意味は聖德太子が佛法一つで十七憲法を樹て

られた精神は、太子が國を治めるには佛法でなければ行かんと唯一の信仰であるといふことを、如何にはつきり言はれたかゞ解ると云ふ事を申し度いからである。太子が治國の第一義を佛法一つに言ひ放ち玉ひしは、後世から見ると頗る大膽で、寧ろ不公平に思ふて、五憲法を僞作したるものなるべけれど、聖德太子が堂々と佛法一道を押立てられたが實に深き味があるのである。信仰といふものは、唯一でなければいかぬ。色々のものを混ぜる時は信仰ではない。一度佛に歸依して、佛が有り難いとなれば、他のものに心が移つて居られない。三寶に歸するものは、三寶以外のものに歸してはならぬとの親鸞聖人の御示と、太子の憲法第二條の篤敬三寶とは、ぴつたりと符合するのである。

近頃內務省でも、三敎の代表者を會合せしむるといふ企があつて、此について政治敎育各方面の人がいろ〳〵に論じて居るが、併し信仰の上から着眼して佛の御慈悲をいたゞいた心から、國家として宗敎に對する態度は斯うでなければいかぬと云ふことを言ふて居る人が見へないやうである。眞に信仰の上から着眼して企てたのでないと、甚だ遺憾である。而して之を評論する人も信仰の立場より見たる說がない。其であるから今日は信仰の立場より見た所を御話して、此の言を全國の人に聽いてもらひ度いから、今日の講話は能々注意して聽いて下さい。

是は理窟でいふては少しも解らない、唯信心の獲得の一途でわかる。御慈悲の有り難いことの解らない人には、此の問題の筋道道理がわかつても、眞實のところは解らない。失禮なことなれども、眼に一丁字のない人でも、御慈悲を頂いた方は直に解る、もし左樣でないと、殆ど不明に了るのであります。處で順序を立てゝ其信心とは何う云ふものであるか、三寶に歸敬するとはどう云ふことであるか。佛敎中如何なる宗旨も三寶に歸するといふことはあるけれど、其の歸命中に、眞實の歸命といふは、即ち佛の御聲をいたゞいて、南無阿彌陀佛と佛の御心を頂く所が、眞實の歸命である。其うでないと、如何に此の歸命のわけがらが理解出來ても、其はつまらぬのである。先達て其筋の人に信仰の人は一を見て他を認めぬ事を詳しく御話した處が、非常に能く理解された、併し唯理解は理解で、未だ眞の佛の御慈悲をいたゞいたのではないから理解に止つて此問題を正しく解決することが出來ぬ。日本の臣民としてたとへば天皇陛下に仕へる味は、自分が日本臣民になつたでなければわかるものでない如く、南無阿彌陀佛の御慈悲を頂かざれば信仰は唯一なりとの味はわからない。唯想像となり餘所事となるに過ぎないから茲はよく頂いてもらひ度い。

如此三寶に歸敬する眞の味は、佛の廣大なる御慈悲を頂いてみれば、自身の淺ましいことが解り、罪惡深重の身なることを知り、廣大な仰せのもとに、一身を捧げ、滿足して其のまことが疑ふことが出來ぬ樣になつた所が、眞の信仰である。其信仰を頂かずしては、三寶を歸敬するといつても、念佛を申しても其は假である。而して此眞の御慈悲を頂かぬものなれば、是佛の敎にあらずして、外道である。『信卷』に

僞とは六十二見九十五種の邪見、是なり。涅槃經に言く、

世尊常に說く、一切の外は九十五種を學びて、皆惡道に趣く。光明師云く九十五種皆世を汙す、唯佛一道獨淸閑なり。

此の御慈悲を頂く以外のものならば、如何なる敎でも佛法からいへば、盡く皆外道邪僞であると明にわけられてある。

殊に信仰の實驗を味はうた者からは、此のわけが明にわかるけれど、一般の人が誰も疑ふて居る所を遠慮なく言ふて見れば、佛法中でも、他力の敎と禪宗とは違つて居る事がわかるけれど、他力敎と基督敎とは却て似て居り、相接近して居ると思ふて居るものが少くない。動もすると、理窟上より、佛敎內の人も左樣に思ふて居る、而して佛法と他の宗敎との相違がわからないで居る。又哲學の研究などから其う云ふ思想に傾くと云ふのは、畢竟は信仰を得て居らぬからであります。だから世人が皆宗敎は種々あれど、結局同一だと混合して居るのは、素人考としては無理ならぬことなれども、眞實信仰上の實驗から言へば、ほんとではありません。

眞の佛法は生死の苦に迷ふて居る、吾々人間が其迷界から解脫して、永劫の安心を得、轉迷開悟するのが第一義である、佛法各宗みんなさうてある。人生の苦を離れて、眞の涅槃の光を得ると云ふのが佛法と他敎との分れ道である。設例印度敎て涅槃をいふても、其は眞の解脫の涅槃でない故に、佛陀を目當として、罪の迷を離れる解脫涅槃の敎と、實在天地の神をたて、世界の組立を說く敎とは、丸て出立が違ふて居るといふことを忘れてはならん。

其出離解脫の佛敎中に、自力で佛の境界に進んで行く聖道門と他力の佛の惠に救はれて行く淨土門との二つがある。今日は其の二つの間の區別をあまり言ふ必要はない、何れにしても佛陀を目當とする點に於て、同一佛法である。佛の御惠に救はれて眞に安心して行く他力の敎は、他の自力の敎とは違ふて形がクリストなどゝ似て居ても、佛敎の他力は宇宙人生が神に支配され、又、靈魂の實在すると云ふこととは全く違ふ。即生死を解脫し、涅槃に行くには自分の力で行けるか、非常な慈悲の人の力で行けるかと云ふ點である。天地を作り、宇宙を支配する一神でなくして、十方衆生を轉迷開悟せしむる一佛本願である故に、佛法上他力の根本、南無阿彌陀佛の本願には、宇宙がどうの世界がどうのなど云ふことは說いてない。本願には十方衆生唯此佛の慈悲を頂けとある許りである。生老病死の二十五有界に迷ふて居る十方の衆生に對し、實在の神からでなく、又世界を造つた神からでもなく、迷をばなれた佛の境界一如法界から御覽なされ、衆生の爲め姿を現はした法藏菩薩から、吾々衆生を御覽になつた時、吾々が苦惱を憐み玉ふ佛の大慈悲の親こゝろ親切が基となり、其のやる瀨のないまことを吾々に知らしめ、其の心が吾々の迷ひ苦しめる心にとゞいた時、初めて不斷煩惱得涅槃の味がいたゞけるのである。是即ち如來本願の眞味である。而して吾々を見捨てない御慈悲を頂いた時、自己の罪惡を自覺し、心底から御慈悲が有り難くいたゞけ、佛の國に生れたい心が起させて頂き、至心信樂南無阿彌陀佛と頂けたのは佛の御心のとゞいたのである。其一念て念佛が口に浮んで下されたが、念佛成佛是眞宗といふのである。斯く頂いて、佛の惠の中に安心すれば、有り難いと頂く佛の外に何物をも眺めることが出

衆ぬ。眞に御慈悲一つと云ふ所が肝心である。是即三寶歸伏の意味である。聖德太子が三寶歸依の敎を知らせ下されてから、色々の宗旨が起り、鎌倉時代に至り、法然聖人が初めて淨土宗を起させられ、親鸞聖人が其法然聖人から他力淨土の敎を受けさせられて、眞の淨土眞宗を起させられたのである。法然聖人選擇集の御敎化を詳敷頂かなければならぬが、常に申すことなれば、略して申せば、佛が吾々衆生を助けるに色々の行の中から選擇して下されたが、念佛一つである。是他の行が出來る位なれば、念佛はないのである。即他の行の及ばぬものゝための念佛である。故に一向專念無量壽佛と申して、念佛以外に他の行を並べぬのが、法然聖人の念佛の特徵である。

然るに困ることには、多くの人は信仰を得るに大綱を張つて考へる。初めは、そろ〳〵大體の所をいたゞいて追々と眞の信仰に入るものと考へて居るのは、實に間違つて居る。信心は聽く一念に直に眞實の佛のまことを頂くのである。是が一向專修の眼目である。

法然聖人が戒を保たば、保つて念佛せよ、座禪出來れば座禪して念佛せよと言はれたならば至極融通が利いて無事であつたらうけれど、左樣なると眞の選擇の味がないのである、と云ふのは、吾々は何れの行も出來ないではないか、どうすることも出來ないから御上から救ひの使を遣はして下さるのである、他の敎はあたりまへであるけれど、出來ないから南無阿彌陀佛の一法が出て來たのである。救ひとは他の何れの道も絶えたればこそ起れ、御慈悲ばかりで安心さして頂くのが一向專修である。此處を『歎異鈔』にたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよき人の仰を蒙りて、信ずる外に別の仔細なきなり、乃至いづれの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかぞかしといひ、『改悔文』に、もろ〳〵の雜行雜修自力の心をふりすてゝ、一心に阿彌陀如來我等が今度の後世の大一事御助け候へと賴み申して候とあるも是である。

廣大の佛の御慈悲が有り難いと云ふ外に、色々の力が見へるのは眞の信ではない、眞の信仰は、色々の行の出來ないものを、念佛一つで救はうとのやるせない御慈悲である、だから法然聖人の御流罪になつたのも、此の一向專修の爲めである、眞の敎は唯南無阿彌陀佛ばかりであると言ふたから、迫害を蒙りたのである。法然聖人御流罪の時信空上人に仰せらるゝに、

我齡すでに八旬にせまれり同じ帝畿にありともながく生きて誰か見ん云々。驛路はこれ聖者のゆく處なり云々。上古の英聖猶然り況や末世の愚悉をや云々。此時にあたりて邊鄙の群衆を化せんこと莫大の利生なり、但痛むところは、源空興ずる淨土の法門は濁世衆生の決定、出離の要道なるがゆへに、守護の天等定て冥瞰をいたさん歟云々。前代未だ聞かざること常篇に絶たり、因果のむなしからざること生きて世に住せばおもひ合すべきなり云々。

後承久の亂の時、果して法然聖人を迫害した、人々が流刑或は死刑の慘害を見られたのである。聖人流罪の途に上られる時に當りても、如此一向專修の念佛を勸めらるゝのを見て、西阿といふ御弟子が進み出でゝ、今日許りは世間の機嫌が、

如何思はれて、御控へあつていゝと申上げた時、平日溫和なる上人が西阿を顧みて、「汝經文を見ずや云々、われたとひ死刑にあこなはるともさらに變ずべからず」と、勵聲せられたのである。融通の付くものならば、聖人が如此仰せられた御言葉は全く無用のことになつてしまふ。眞に罪業深重の身の上であると知らしてもらふた上は、たとひ死刑に處せられても、此の念佛は止められぬである。法然聖人の此の御言葉を聽いて一座のもの皆落涙したといふことである。

親鸞聖人は法然聖人の御弟子三百八十餘人の中で其處の肝心な處を傳へられたから、是が眞宗である一向宗である。惠み一つと頂かせてもらふた時、一向專修になるのである。之でなければ眞の罪惡觀は出て來ない。

クリスト敎で、汝の親をすてゝ神に從へのと云ふ、而して其意味が、如何にも相對的にきこえて大抵倫常と兩立しない樣な說き方である。しかるに眞宗に親鸞は父母孝養の爲めに一遍にても念佛申したると未だ候はず、とあるを同樣に相對的に考へて、孝養をすてゝ、信仰だと云ふ樣に考へてはならぬ。眞宗の意味は親孝行が出來る位なら孝行もいたさう、だが一善一行出來ぬ罪業深重の身で、親を助けやうなんどいふ回向は叶はぬのである。父母孝養の出來ぬ樣なものを助けて下さる御慈悲が念佛である。此の親心の回向にあづかつた時は、あゝ有り難い、左樣のお慈悲であつたか自分は實に親不孝のいたづら者であると頭が下るのである。(危險思想といふは信仰がこゝの處が徹底せずに中途に、ぶらつゐて惡平等に陷つて居るから起る思想である。)而してすべき行の出來ぬものを救ふて下さる御慈悲を頂きて見れば、此世の親許りでなく、世々生々の父母兄弟と雖も、みんな佛の御慈悲なれば同樣にいたゞかれるのである。而して愈々自身が佛にならせていたゞいた時に、還相回向の利益にて共に佛の救に入れることが出來るのである。

今申した處に色々問題が含まれて居る。第一に信心がなければ道德は行へるものでない、道德が行へるならばよけれども、すべき善事が出來ない不孝な私を助けて下さる御慈悲である。若し倫理と信仰とを駢べて一方のことを捨てゝ、親をすてゝ神を信ずるのであると考へたら道德と矛盾する。相對的に此を捨て彼を取ると云ふのは惡い。道德と信仰とは矛盾するものではない。

佛の御慈悲が頂け頭が下つた時、親の御恩君の恩がわかつて、眞の道德が現はれて來る。佛の眞の御慈悲を頂く一念に親師匠の御恩人の恩が(告白欄參照)一時にわかつて來る、南無阿彌陀佛の御慈悲一つを頂けば、其中から道德上の力は勿論、社會に滿ちたあらゆる力は其處から現はれて來る。此の御惠み一つを頂いた時にもろ〳〵の佛もろ〳〵の神は其處であり〳〵と喜んで下さる。

南無阿彌陀佛を稱ふれば、此の世の利益きはもなきし。云々

玆で『化身土』の卷が、丁度うら返へりになる。南無阿彌陀佛以外に事へぬ、其代り南無阿彌陀佛を頂く時は其以外のすべてが生きて來るのである。此惠みの人生に及ぶ有樣は、先に父母孝養の爲に念佛一遍にても申したることなしとあるが、今

度は朝家の御爲め國民の爲に念佛申し候べしと、恰も裏ひらになつて來るやうに見へる。古來此朝家の御爲め國民の爲め念佛申し候べしといふ句は、動もすると世間に順應して國の爲に戰へ、國の爲に殖産興業勤儉貯蓄せよといふ時に引かれる。而して肝心な念佛申し候べしてある所を忘れて居る。即念佛信心が國の爲に盡す事になる。抑眞の信仰を得て自己の罪惡を自覺すればどうしても頭が下らずには居られない、念佛を妨ぐるとも世に災難が起らぬ樣、念佛に仇をなすものにも信仰がいたゞける樣、朝家の御爲め、國民の御爲め、念佛申候べし、との仰せてある。眞の御慈悲から俗諦門が出て來るのである。信なくして國の爲に念佛するなれば、現世祈りてゐる雜行雜修である。だから御開山聖人は其次の文に「往生を不定におぼしめさんには、まづわが身の往生をおぼしめして御念佛さふらふべし。」といふてある。自分が信心を頂いた上は、他の人にもどうか此の御慈悲を頂いてもらひ度いと云ふ御報恩の心から、朝家の御爲め、國民の爲め、念佛申すと云ふ事が出て來るのである。だから眞に國の爲めといふことになるのである。

斯ういふ信仰であるから此御恵みを頂いた上は、國家が國民に對して宗教の爲めに、心懸けよといふ上に、何の信仰でもよいと云ふことはいはれぬ。一向專修の信心といふものは、此の御慈悲なればこそ助かるのである、何でもよいといふのでは聖德太子がいはるゝ三寶歸敬とはならぬ。此が遡れば十七憲法の第二條及び法然聖人の一向專修、親鸞聖人の一心一向蓮如上人の雜行すてゝ他力に歸すといふことになる。

信仰問題の上で眞僞の區別がわからぬ、宗教であれば佛でも神でも耶蘇もよいといふ遺憾な間違になるから、『教行信證』化身土の卷の眞僞勘決の文によつて其の旨を述べたのである。

本誌本號分た〳〵非常の延刊と相成り申譯なく御詫び申上候。今後は是非々々毎月發行のつもりに候間此上御愛讀法味御愛樂願上候。近角は本月十八日發程、石見地方御熱心なる御有志の御求めにより同地方に傳道いたし、歸途郷里に立ちより、來月十三日第二求道會迄には相違なく歸京の事に相成り居り候。右延刊御詫び旁々申上候。

追て本誌本年度裏紙翻案、例年の如く武田學士の御厚意により、本號より改むることに相成り居り候處、發行間際に計らざる間違を生じて、餘儀なくかゝる不躾裁の事に相成り申譯御座なく候。

求道發行所

時勢の要求する所、曩日求道會館設立趣意書の發表となりしが、爾來數年を經て未だ會館設立の運びに至らず、これ畢竟近角師が專心一意布教傳道に急にして、實際經營の餘暇を有せられざるが爲なり。然るに明年は學舍創設已後滿十年たらんとし、信仰の氣運正に純熟して、求道者益々多きを加へ、從來の設備を以ては此の要求を滿足せしむるあたはず、且つ現在の家屋漸次朽敗して會館建設の必要は更に焦眉の急を告ぐるに至れり。

我等同志或は師の勸化に隨喜し、或は師の熱心に同情する者茲に胥謀つて、專ら勸募の事に從ひ、以て師の素志を貫徹せしめんとす。伏して願はくば四方有緣の士助施捐財以て此の必需有用の事業をして速に完成せしめられんことを、謹て白す。

明治四十四年七月

世話人（イロハ順）

西澤善七　小河滋次郎　大草慧實　荻野仲三郎　柏原文太郎　長尾收一　澤柳政太郎　廣

求道會館設計豫算概要

一金參萬五千圓　會館建築費備付品費並ニ之ニ關スル諸雜費

求道會館設計概要

瓦葺煉瓦造坪數八十八坪

求道會館建築寄附金第三回報告

（四十五年二月初より三月初まで）

一金貳拾圓也　本所　笠木輔一殿
一金貳拾圓也　高松　都崎榮子殿
一金貳拾圓也　熊本　今井正親殿
一金拾五圓也　越後　丸山惣吉殿
　　丸山（ヨシ）子殿
一金拾五圓也　越後　丸山富治殿
一金拾圓拾錢也　朝鮮　澁谷太吉殿
一金拾圓也　米國　西脇鎌吉殿
一金拾圓也　札幌　齋藤弘輔殿
一金拾圓也　三重　渡邊知空殿
一金拾圓也　滋賀　上田千次郎殿
一金拾圓也　神田　伊藤殿
一金拾圓也　本郷　佐藤直丸殿
一金拾圓也　芝　塚原秀峰殿
一金拾圓也　府下　小作伊助殿
一金拾圓也　同　中里庄五郎殿
一金五圓六拾五錢也　播摩　西勝寺殿御門徒有志殿
一金五圓也　福岡　無名氏殿
一金五圓也（第二回）　三重　西川眞十郎殿
一金五圓也　盛岡　昆善藏殿
一金五圓也　石見　佐野長兵衛殿
一金五圓也　本郷　村上義一殿
一金五圓也　四ッ谷　大谷繁次郎殿
一金五圓也　長野　笹岡重作殿
一金五圓也　滋賀　伊香賀矢六殿
一金五圓也　神田　前本義和殿
一金五圓也　京都　藤澤乙夫殿
一金五圓也　長野　水野啓治殿
一金參圓也　越中　中山德融殿
一金參圓也　無名氏殿
一金參圓也　鹿兒島　原一敬殿
一金參圓也　信濃　服部清九郎殿
一金貳圓也　越中　桃井增香殿
一金貳圓也　福岡　坂野富衛殿
一金貳圓也　越中　小池義範殿

一金貳圓也　越後　瀨戸作次殿
一金貳圓也　石見　增野護信殿
一金貳圓也（第二回）　東京　宇佐美英太郎殿
一金貳圓也　長野　今清水善助殿
一金壹圓五拾錢也　越後　渡邊市藏殿
　　仝　ナカ子殿
　　仝　ミネ子殿
一金壹圓也　越中　西田辰正殿
一金壹圓也　同　遠藤長平殿
一金壹圓也　同　藤塚西珠殿
一金壹圓也　越後　田中廣志殿
一金壹圓也　同　治田榮吉殿
一金壹圓也　同　堀川又藏殿
　　仝　よみ子殿
一金壹圓也　同　草野登茂殿
一金壹圓也　同　船山良吉殿
　　仝　とせ子殿
一金壹圓也　同　近藤好治殿
一金壹圓也　同　志賀惣吉殿
一金壹圓也　同　佐藤善九郎殿
一金壹圓也　同　飯山三次殿
一金壹圓也　同　兒玉松之助殿
　　小林權松殿御内はつ子殿
一金壹圓也　同　眞島ハル殿
一金壹圓也　越後　金山仁七殿
一金壹圓也　美濃　橋本壽榮殿
一金壹圓也　和歌山　谷井壬午郎殿
一金壹圓也　麻布　赤尾信教殿
一金壹圓也　麹町　森田わか子殿
一金壹圓也　山形　大江精一殿
一金壹圓也　麹町　石山須磨子殿
一金壹圓也　大阪　爲貴七覺殿
一金壹圓也　越後　大宮藤四郎殿
一金壹圓也　富山　館一平殿
一金壹圓也　兵庫　宮崎虎治殿
一金壹圓也　薩摩　國生嘉之助殿
一金壹圓也　府下　小林サト子殿
一金壹圓也　廣島　神田彦一殿
一金七十錢也　越後　荒木孫三郎殿
　　外御家族御一同殿
一金五十錢也　越中　島崎盛定殿
一金五十錢也　越後　宮路平吉殿

一金五十錢也　越後　星野六太郎殿
一金五十錢也　同　西村與作殿
一金五十錢也　同　内藤長次郎殿
一金五十錢也　同　寺田輝衛殿
一金五十錢也　同　星野藤二殿
一金五十錢也　同　鈴木清七殿
一金五十錢也　同　五十嵐惣次郎殿
一金五十錢也　同　平石くま子殿
一金五十錢也　芝　高橋いく子殿
一金參十錢也　越後　栗林今藏殿
一金貳十錢也　東京　無名氏殿
一金貳十錢也　越後　片桐次郎殿
一金貳十錢也　同　永澤みよ子殿
一金十錢也　越中　早崎治市殿

總計金參百貳拾四圓四拾五錢也

累計金七千五百七拾參圓四拾六錢也

右之通りに候也

明治四十五年三月十日

世話人總代　長尾收一
會計監督　西澤善七

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀

會館喜捨金御寄附御注意

一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必らず御記入願上候

二、寄附金領取の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候

三、寄附金は御都合に從ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜敷候

東本願寺法主大谷光演上人題句　前田慧雲博士題詩
西本願寺法嗣大谷光明上人題辭　南條文雄博士序文
高田派法主常盤井堯熙上人題詠　鐵腸安藤正純氏著

親鸞聖人

親鸞聖人の滅後方に六百五十年遺教全國に遍く信徒五百萬と稱す著者此の偉人の芳蹟を尋ねて墮落せる教界を警覺し輕浮なる思想界に貢献せんとして北陸關東東海京畿聖人一代行歴の跡を巡禮し著者一流の筆を以て忌憚なく其の感想を披瀝し附するに聖人の傳記を以てして一記錄を破れる巡禮記たり以て趣味津々たる聖人傳たり東西高田三派法主の題詠卷頭を飾りて光彩陸離

特價壹圓五拾錢

光澄上人の「石を抱て追ふ」の句は「一尺餘の横雨傾すれば時雨の三寸餘の竪切り掛軸畫箋紙に摺にて光明上人の「祖德宜揚」の四大字題詠と共に御肉筆同樣に見事なり

各地舊蹟寫眞版

色摺四拾九圖拾四葉○舊蹟見取圖數圖見返印刷○結城素明氏裝釘鳥子紙摺金文字入箱入頗美本本文總ふりがなつき題字三葉○正價金壹圓八拾錢○小包料拾六錢

建如上人

五百萬の生靈に臨める眞宗の光明は王法爲本の克ち得たる熟誠に至つては人生稀有の勤王的教義の輝きなり王法爲本は蓮加上人の精神にして其八十年の生涯は之が奮闘の歴史なり山門の迫害と武家の威壓とを凌ぎて將に亡びんとする宗勢を挽回し遂に佛日再中の盛運を克ち得たる熟誠に至つては人生稀有の立志篇なり成功史なり著者の忠實なる親しく遺跡を歴訪し以て此篇を大成す當に知るべし平民教主の面目を知らんとする士は須く一讀すべし

特價壹圓五拾錢

光瑩上人の「法喜」の三大字、光明上人の「佛日再中」の四大字は上等雁皮紙に印刷し横軸又は額面用に供したり何れにも御肉筆同樣に見事なり

東本願寺前法主大谷光瑩上人題辭　前田慧雲博士序
西本願寺新法主大谷光明上人題辭　南條文雄博士序
佐々木月樵師跋　中澤光弘氏畫
結城素明氏裝

上人眞蹟肖像各由緒地寫眞版色摺十葉○中澤畫伯三色版御傳繪八葉○上人作謠曲上人年表傳燈略系巡禮行等附錄○鳥子紙極彩色摺實如上人御眞筆金字入箱入頗美本本文總ふりがなつき○正價金壹圓八拾錢○小包料拾六錢

發兌元　麹町區平河町五丁目五番地（振替東京三八一七）　金尾文淵堂
發賣　神田錦町二〇番地（振替東京六二一）　勉強堂

近角常觀著

信仰問題

第六版

菊版二百頁以上

代價一冊六拾五錢郵税六錢

如何にして信仰を得可きかとは、現時青年の叫にして、如何なる信仰を以て社會を經營すへきかとは二十世紀の問題也、本書内篇は前の疑問に答へたるものにして、外篇は後の疑問に答へたるもの也

内篇には内的實驗の主義に立ちて現時紛糾亂雜せる哲學、倫理、等の關係に向て直截簡潔なる判斷を下し、宗教の眞髓を攫み來りて切實なる求道者に與へむとする者、其信仰の極所を叙するに至りて慈光春風の世界に遊びて攝取の清懷に悟融するの想あらしむ。外編は社會の病源に向て根本的の救濟を施こし、理想の淨國を世に實現せんとする者、歐米各國の宗教界及ひ社會事業を紹介し、飜て佛教原初の眞精神を説き、將來清新にして且つ健全なる社會的經營を皷舞し來る、繙く者をして感激奮起せしむるものあり。本書卷首に米國シカゴ青年會館、英國兩院及ウエストミンスター寺院、獨逸ルーテルの聖書飜譯室、佛國宗教歴史大會の寫眞石版圖を掲け、附錄として著者洋行中の通信及ひ旅行記を收む趣味津々聊か讀者を慰むるに足らむか。

近角常觀師序 鈴木龍司著

入信之經路

正價三拾錢

郵税四錢

著者は宗教家にあらず、僧侶にあらず、たゞ現代に生活し、現代の空氣に觸れ、而も、所謂近代人たるに甘んずることを尚ざる一青年也。

然り而して、筆をその幼時の記憶より起し、中學にありては、儒教的理想と奮鬪し無我愛を信じては、進むべきの行路を得、第一高等學校の三年を經過して、文科大學に學びては、所謂灰色の人生觀に滿足すること能はずして、張合のなき日暮しをかこち、遂に一事件に遭遇するや、今迄の修養的立場、主觀的立脚地にてはいかにするとも安住の地を見出すこと能はず、一切の思想を捨て直ちに走りて、絶對他力の恩寵に浴し、佛陀切々の慈愛に泣くの狀二十四年の心的經過と相待つて、一の飾りなく、有の儘に告白するもの即ち本書也。衷心止むに止まれぬ欲求を持して、暗黑の裡に彷徨する眞面目なる近代的青年の苦悶の跡萬人の肺腑を衝いて人をして思はず佛陀の大懷に宿らざるを得ざらしむ。世の理想なきに苦しむもの、人生問題の歸趣を得ざるに惱むの士是非一讀をすゝむ。

發行所 東京本郷區森川町一廿一番地 森江書店

申込所 東京本郷區春木町三丁目一番地 求道發行所

近角常觀編著書目

人生と信仰 三版 郵税四錢 定價卅錢 袖珍本

懺悔錄 七版 郵税貳錢 定價廿錢 袖珍本

親鸞聖人の信仰 貳版 郵税八錢 定價七十錢 クロース綴

冠頭 歎異鈔 五版 郵税三錢 定價五錢 施本用二冊迄二錢

冠頭 唯信鈔文意 新版 郵税二錢 定價七錢 施本用

規定

一 本誌は毎月一回一日發行とす

一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず

一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事

一 郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事

一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

一 本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事

一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事

本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

◉廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十五年三月十一日印刷
明治四十五年三月十五日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所 求道發行所
(振替口座東京一六六九六番)

申込所 東京市本郷區森川町一番地 振替東京一六六九六番

大賣捌所 東京市神田區表神保町 東京堂

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

永遠第九億第二號　明治四十五年三月十五日發行（毎月一回一日發行）　明治四十五年二月二十五日印刷納本

前號要目

求道

◎三教會同に關する信仰的論斷　三須善太郎

講話

◎親鸞聖人の德音　近角常觀

告白

◎如來の悲願はかくの如きの我等かためなりけり　加藤竹三郎

雜錄

◎御慈悲になれたる横着者

◎大草惠實師を悼む　近角常觀